

三木市

与呂木遺跡

— 一般県道三木環状線道路改良事業に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 —

1994年

兵庫県教育委員会

三木市

よ ろ き
与呂木遺跡

一般県道三木環状線道路改良事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告



1994年

兵庫県教育委員会

例言

1. 本報告書は、三木市与呂木に所在する、与呂木遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、一般県道三木環状道路改良事業に伴うもので、兵庫県社土木事務所の委託を受けて、昭和62年度から平成3年度にかけての4次にわたって兵庫県教育委員会が調査を実施した。
3. 現地における調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。遺跡調査番号および担当者は以下のとおりである。

平成62年度 確認調査 (870052)	古識雅仁・山田清朝
平成元年度 全面調査・確認調査 (890124)	西口圭介・鐵 英記
平成2年度 全面調査 (900013)	種定淳介・西口圭介・中村弘・長瀬誠司
平成3年度 全面調査 (910101)	村上賢治・甲斐昭光
4. 整理作業は平成5年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および魚住分館において実施した。作業には、嘱託員の協力のもと、調査員があつた。
5. 調査現場での遺構等の実測・写真撮影は調査員が行い、遺物の写真撮影については三宮写真館に委託した。
6. 本書の執筆は本文目次に記したとおりに分担し、編集は鐵が行った。
7. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下650-1）に、写真および図面は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）に保管している。

凡例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準を基とし、方位は磁北を指す。
2. 遺物は本書掲載順に通し番号を付け、遺物の番号は本文・挿図ともに統一している。
3. 土器実測図の断面を以下のように区別することによって、種類の違いを表現している。
弥生土器・土師器—白抜き / 須恵器—黒塗り / 陶磁器—網掛け

本文目次

第1章 はじめに (西口圭介)	1	第5章 B地区の調査 (長濱・種定淳介)	26
第1節 調査に至る経過		第1節 調査の概要	
第2節 調査の体制		第2節 遺構	
第2章 位置と環境 (長濱誠司)	3	第3節 遺物	
第1節 地理的環境		第4節 小結	
第2節 歴史的環境		第6章 C地区の調査 (長濱・西口)	39
第3章 各年度の調査の概要	6	第1節 C-1地区の概要	
第1節 昭和62年度調査 (吉議雅仁)		第2節 C-2地区の概要	
第2節 平成元年度調査 (西口)		第3節 遺構	
第3節 平成2年度調査 (西口)		第4節 遺物	
第4節 平成3年度調査 (西口)		第5節 小結	
第4章 A地区的調査 (鎌 英記)	11	第7章 D地区的調査 (甲斐昭光)	51
第1節 調査の概要		第1節 調査の概要	
第2節 遺構		第2節 遺構	
第3節 遺物		第3節 遺物	
第4節 小結		第4節 小結	
		第8章 まとめ (西口)	56

挿図目次

遺跡位置図

第1図 周辺遺跡分布図	4	第6図 A地区掘立柱建物1 平・断面図	14
第2図 確認調査位置図	7	第7図 A地区掘立柱建物2 平・断面図	15
第3図 調査区位置図	9	第8図 A地区土坑1 平・断面図	16
第4図 A-1地区 平・断面図	12	第9図 A地区出土土器(1)	17
第5図 A-2地区 平・断面図	13	第10図 A地区出土土器(2)	17

第11图 A地区土坑1出土土器(1).....	18	第25图 B地区出土遗物.....	33
第12图 A地区土坑1出土土器(2).....	19	第26图 B地区竖穴住居1出土土器.....	34
第13图 A地区土坑1出土土器(3).....	20	第27图 B地区出土石器.....	35
第14图 A地区出土瓦(1).....	21	第28图 B地区出土铁器.....	36
第15图 A地区出土瓦(2).....	22	第29图 C-1地区 断面图.....	39
第16图 A地区出土土鍤.....	24	第30图 C-2地区 平·断面图.....	41
第17图 A地区出土铁器.....	24	第31图 C地区掘立柱建物1 平·断面图.....	43
第18图 A地区出土石器.....	24	第32图 C地区土坑1 平·断面图.....	44
第19图 B地区 平·断面图.....	27	第33图 C-1地区出土土器.....	47
第20图 B地区竖穴住居1 平·断面图.....	29	第34图 C-2地区出土遗物.....	48
第21图 B地区竖穴住居状造構 平·断面图.....	30	第35图 C地区出土石器.....	49
第22图 B地区掘立柱建物1 平·断面图.....	31	第36图 D地区 平·断面图.....	52
第23图 B地区土坑1·2 平·断面图.....	32	第37图 D地区出土土器.....	54
第24图 B地区溝1 断面图.....	32		

写真図版目次

図版一 遺跡遠景	図版十五 A地区出土遺物
図版二 A地区遺構	図版十六 A地区出土遺物
図版三 A地区遺構	図版十七 A地区出土遺物
図版四 B地区遺構	図版十八 A地区出土遺物
図版五 C地区遺構	図版十九 A·B地区出土遺物
図版六 C地区遺構	図版二十 B地区出土遺物
図版七 C地区遺構	図版二十一 B地区出土遺物
図版八 D地区	図版二十二 C地区出土遺物
図版九 D地区遺構	図版二十三 C地区出土遺物
図版十 A地区出土遺物	図版二十四 C地区出土遺物
図版十一 A地区出土遺物	図版二十五 C地区出土遺物
図版十二 A地区出土遺物	図版二十六 C地区出土遺物
図版十三 A地区出土遺物	図版二十七 D地区出土遺物
図版十四 A·B地区出土遺物	

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経過

一般県道三木環状道路は宿原から細川町中に抜ける道路である。このうち、永久橋北側から現在の与呂木の集落を西側へ迂回する区間が新設の道路部分である。

新設の道路が施工される三木市と呂木地区では平安時代中頃の須恵器・瓦を焼成した窯跡が確認されており、与呂木窯址として分布地図に登載されている。また、弥生時代の遺跡である与呂木遺跡が周知されている。これら周辺の遺跡の分布状況に加え、道路改良工事の計画に伴い、三市教育委員会が新たに分布調査を実施したところ、計画路線内においても遺物の散布が確認された。

以上の結果を受けて、兵庫県教育委員会は昭和62年度に計画路線内に33箇所の試掘坑を設定し、第1次確認調査を実施した。

昭和62年度の確認調査の結果、A・B・C・D地区の4地点について調査の必要があると判断された。これを受けて、平成元年度にA（A-1）地区の全面調査と併せて、B・C・D地区の遺構の密度・範囲を詳細に掴むためにトレーニングを主とした第2次確認調査を実施した。

平成2年度には平成元年度の調査結果をもとに、A（A-2地区）・B・C地区の3箇所の全面調査を実施した。

D地区的全面調査は用地買収の進捗状況から、平成3年度に実施した。この調査に関しては調査対象面積が狭いため、従来の受託調査ではなく、直接執行による調査を実施している。

出土品及び発掘記録の整理作業は平成5年度に実施し、報告書として纏めた。

第2節 調査と整理の体制

1. 調査体制

発掘調査は、社土木事務所の依頼を受け、昭和63年度の調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が実施した。平成元年度以降の調査は、組織改編に伴い、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査期間、担当者の職氏名は次の通りである。

昭和62年度調査（昭和63年1月19日～昭和63年2月2日）

社会教育・文化財課

主任	古誠雅仁
技術職員	山田清朝

平成元年度調査（平成元年12月14日～平成2年3月25日）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第2課

技術職員 西口圭介

同 鐘 英記

平成2年度調査（平成2年8月1日～平成2年10月5日）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第2課

主任 種定淳介 技術職員 西口圭介

技術職員 中村 弘 同 長瀬誠司

平成3年度調査（平成3年12月2日～平成3年12月4日）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第2課

主任 村上賢治

技術職員 甲斐昭光

2. 整理の体制

調査の結果出土した遺物については、発掘調査を並行して現場事務所で一部の水洗い・ネーミングを実施し、接合・復元・実測トレース・レイアウトの諸作業の大半は平成5年度に埋蔵文化財調査事務所において実施した。整理作業には以下の職員が当たった。

—職員—

主査 加古千恵子

(金属器担当)

技術職員 甲斐昭光

同 菅田淳子

同 鐘 英記

同 中村 弘

同 長瀬誠司

—非常勤嘱託員—

主任技術員 中筋貴美子・古谷章子

企画技術員 片岡喜久子

図化技術員 二階堂 康・早川亜紀子

飯田章子

図化補助技術員 石田裕子

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

三木市は播磨の東縁部に位置し、面積120.04m²、人口77,295人（平成5年8月1日現在）を数える。酒米を主とした農業と大工道具等の金物工業が広く知られた主要産業である。

市域は加古川支流の美嚢川及びその支流志染川沿いに広がっており、市東南部に標高300mを越す山地がある他は小野台地、いなみの台地等の標高100～200mのなだらかな台地に囲まれている。

市の中心部は美嚢川・志染川合流点の西側に位置し、中世以降の城下町・宿場町である。ここは播磨から有馬を経て摂津・京へ到る有馬街道、明石より丹波へ通じる丹波街道の交差点となっており古くから交通の要衝地であった。市街地を外れると純然たる農村地帯が広がっている。しかし、1970年代以降阪神間のベッドタウン化とゴルフ場の造成、1990年代の山陽自動車道建設によってのどかな田園風景は変貌をとげつつある。

与呂木遺跡は美嚢川・志染川合流点東側の丘陵裾付近に位置し、立地は丘陵斜面（A・B地区）と段丘上から沖積地（C・D地区）に大別できる。

第2節 歴史的環境

三木市付近では旧石器・繩文時代の遺跡は今のところ確認されておらず、わずかに与呂木で尖頭器、正法寺山からナイフ形石器が採集されているのみである。しかし、加古川中流域は石器散布地が濃密に分布している地域であり、今後三木市域についてもこの時期の遺跡が明らかになる可能性がある。

三木市内で生活の痕跡が顕著に認められるのは弥生中期以降である。井上遺跡では中期の土器を包含する遺構が検出されている。弥生後期から古墳時代の集落は志染町吉田遺跡、戸田遺跡、小戸田遺跡等で確認されている。吉田遺跡では弥生時代末の壺棺墓が検出されている。戸田遺跡では弥生末から古墳時代の溝が検出され、弥生土器、古式土師器が出土している。この中には搬入土器と推定される壺型土器が含まれている。弥生時代を特徴づける青銅器は正法寺山で細形銅剣が、高塚地区で小銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると三木市内でも多くの古墳が築造される。市内には400基以上の古墳が確認されているが、そのうち前期に遡りうる古墳は加古川・美嚢川合流点付近の丘陵上に築造された前方後円墳の愛宕山古墳のみである。残る大部分の古墳は後期に属する小型古墳である。古墳の内部主体は横穴式石室が少なく、木棺直葬や箱式石棺が大半を占める傾向にある。後期古

墳は与呂木・平井・吉田・広野古墳群等が三木市域を取り巻く台地の縁辺部に築造されている。中でも小野市にまたがって所在する樅山群集墳は150基以上の大規模な群集墳である。古墳は発掘調査されたものが少なく、また破壊がすんでいるものが多いため、不明な点が多い。

発掘調査された古墳のうち志染町窟屋脇坂古墳は単独で所在し、内部主体は横穴式石室墳である。三木山1号墳、大池7号墳は木棺直葬墳であるが、一墳丘に複数の主体部を持っている。

古墳時代後期の集落は西ヶ原遺跡・平井遺跡がある。西ヶ原遺跡は発掘調査の結果住居が30棟以上検出され、大規模な集落であることが判明した。また、すぐ西の丘陵上に位置する大池古墳群との関係が指摘されている。



第1図 周辺遺跡分布図

1. 与呂木遺跡
2. 与呂木群集墳
3. 与呂木窯跡群
4. 平井窯跡群
5. 平井遺跡
6. 西ヶ原遺跡
7. 豊地佐野遺跡
8. 繩川中遺跡
9. 大池古墳群
10. 久留美窯跡群
11. 慈眼寺山城
12. 久留美門前遺跡
13. 跡部窯跡群
14. 加佐山城
15. 三木城跡
16. 三木山1号墳
17. 吉田遺跡
18. 宿原窯跡群
19. 吉田南遺跡
20. 吉田窯跡群
21. 中村遺跡
22. 東吉田遺跡
23. 井上遺跡
24. 井上経塚
25. 井上遺跡
26. 窯屋1号墳
27. 高男寺魔寺

志染町志染中、安福田一帯は『記紀』・『播磨風土記』記載の縮見屯宅の遺跡地とされる。記録では履中天皇行幸や億計・弘計二皇子の逃避が伝えられており、記述の全てが史実ではないにしても当地域が5世紀代より朝廷と密接な関係があったことを反映していると考えられる。加古川中下流域では奈良時代に入ると次々と寺院が建立される。三木市域ではこの時期の寺院跡は知られていないが、小和田神社裏遺跡から白鳳期とみられる搏仏が出土しており、当地域にも仏教の受容があったことは間違いない。

志染中地区では奈良末～平安前期の墨書き器・瓦・漆塗土器が出土しており、付近に寺院か官衙の存在が想定されている。細川町東中遺跡、細川中遺跡・志染町戸田遺跡でも律令期の集落が確認されている。

三木市域を取り巻く台地縁辺には、9世紀から13世紀の長期にわたり須恵器及び瓦を生産した窯址群が所在する。北部の台地には跡部・久留美窯跡群、南部の台地には吉田・宿原窯跡群があり、ここで生産された瓦は平安京内の寺院に供給されていたことが指摘されている。

中世には中央貴族・寺社が所有した細川庄・久留美庄・志深庄等の荘園が所在する。また、集落も東吉田遺跡・豊地佐野地区・豊地宮ノ前地区・西中遺跡・久留美門前遺跡等各地で確認されているが集落と荘園との関連は明らかでない。戸田遺跡では鎌倉時代とみられる集石墓が検出されている。

高男寺庵寺は付近で仁平3年銘の経筒が出土し、調査の結果本堂の雨落ち溝が検出されている。志染町所在の伽耶院でも山内より経筒が出土しており、付近の伽耶院東遺跡では僧坊跡とみられる遺構が検出されている。

三木市街南側の丘陵上には中世後期に播磨守護代である別所氏が築造した三木城が所在する。城内は部分的に発掘調査が行われ、西ノ丸跡と推定される場所からは貯蔵庫とみられる大甕群等が検出されている。三木城を遠望できる丘陵上には織田軍側が城攻めの際に築造した平井山本陣をはじめ加佐山・慈限寺山城等の陣城がある。また、与呂木にも陣城が築造され、平井山本陣をめぐる平井山合戦の舞台となったことが『播磨鑑』に記述されている。

参考文献

- ・兵庫県三木市『三木市史』1970
- ・兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』第1巻 1974
- ・神戸新聞出版センター『兵庫県大辞典』 1983
- ・三木市教育委員会『社会教育活動状況報告書』 1985～1990
- ・三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報』一昭和50年度～昭和59年度一 1986
- ・毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会『久留美毛谷一古窯跡群等の発掘調査報告書一』 1990
- ・宮田逸民「織田政権と三木城包囲網」『歴史と神戸』169 1991

第3章 各年度の調査の概要

第1節 昭和62年度の調査

1. 調査の方法

三木市教育委員会による分布調査の結果に基づき本年度は確認調査を実施した。調査は $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドによる方式を採用したが、設定にあたっては分布調査において遺物の散布が多く見られた地区や段丘上や自然堤防上にあたる地区を中心に設定し、後背湿地等の地区についてはやや粗く設定した。また、当初設定したグリッド調査において遺構等が確認され、遺構の広がり、遺構の是非について判断が困難な場合は、新たにグリッドを設定したり、あるいはグリッドを拡張するという方法を用いて、遺跡の有無と範囲の把握に努めた。

2. 調査の結果

上記の方法による調査の結果、遺構が確認されたのはNo.4・5・28・29（A地区）、No.10・11・31（B地区）、No.19～24（C地区）の3地区である。

A地区では平安時代後半の土坑・柱穴等の遺構が2面で確認された。北側のNo.1～3・27の地区、南側6～8・30の地区では遺構が確認されていないことから、極めて狭い範囲に遺構が広がっているものと思われる。

B地区では平安時代前半頃と想定される柱穴を確認したが、調査対象範囲に未買収地が多くあり、遺構の広がりについては把握できていない。今後さらに遺跡の範囲把握のための調査が必要である。

C地区は微高地にあたる地区で、溝を1条検出したが、遺構とも自然流路とも断定できなかった。また、ここでも未買収地が多くあり、充分な確認調査を実施し得ていない。この地区についても今後充分な確認調査を実施する必要がある。

第2節 平成元年度の調査

昭和62年度の確認調査の結果を受け、平成元年度ではA地区の全面調査（A-1地区）とB地区・C地区・D地区の第2次確認調査を実施した。A地区及びB地区・C地区的トレンチについては耕作土・床土を機械力によって除去した後人力によって遺構面まで掘り下げた。また、C地区・D地区のグリッド1～6については全て人力による掘削を実施した。また、B地区のトレンチについては当初2本のトレンチ（トレンチ1・2）を予定していたが、社工事事務所側から工事予定地内に本体工事に先立ち排水溝を敷設する計画が上がったため、水路を敷設する範囲の全面調査をもって確認調査に代えることとした。幅約1.5m・長さ約25mと幅約1.5m・



第2図 確認調査位置図

長さ約18mの2本のトレーナーが接合した「く」の字の調査区である。この排水路敷設工事は、A地区とB地区の間の部分についても、調査期間中に行われたため、立ち会い調査を同時に実施した。これは、第1次確認調査においては遺構が確認されなかったA地区とB地区の間についても、A地区的調査の進展に伴い、遺構の存在する可能性が高まったためである。

C地区に設定したトレーナー3~6のうち、C-1地区に設定したトレーナー3~5の規模は幅1.5m・全長10m、C-2地区に設定したトレーナー6の規模は幅1.5m・全長20mである。トレーナー3~5では遺構を確認することができなかつたが、トレーナー4では水田畦畔を確認している。また、トレーナー6においては2枚の水田面及び畦畔の他、中世の集石土坑を1基検出した。

グリッドは2×2mの規模のものをC地区（C-2地区南半）に4箇所、D地区に2箇所設定した。調査の結果、グリッド4・5において柱穴を検出した。また、グリッド2・3においては、遺構は検出されなかつたが、グリッド4・5と同じ遺構面が存在することを確認した。

以上のトレーナー・グリッド・立会いの調査結果をもとに全面調査区を設定し、次年度の調査へと引き継いだ。

第3節 平成2年度の調査

前年度の調査結果を受けて、A地区（A-2地区）・B地区・C地区（C-1・C-2地区）の全面調査を実施した。

調査は各地区とも上層の堆積土掘削を社土木事務所が機械力によって実施し、以下の人力による精査を兵庫県教育委員会が実施した。

A-2地区は前年度調査区の西隣にあたり、柱穴群が延びると考えられる部分である。調査の結果、掘立柱建物1棟を検出した。

B地区は尾崎神社前に設定した全面調査区である。前年度に北縁を調査しており、住居址状遺構・ピット・溝を検出している。今年度の調査では、円形竪穴住居1棟・土坑2基・掘立柱建物1棟・溝を新たに検出している。

C地区は道路を挟むC-1・C-2地区を調査した。C-1地区では流路及び古墳時代の遺物包含層を検出した。また、C-2地区では、水田遺構・水田に伴う溝・土坑・掘立柱建物1棟・ピットを検出している。

D地区は当年度は調査に到らなかつた。

第4節 平成3年度の調査

D地区は県道を挟み、C-2地区の南側に位置する調査区である。平成2年度までの調査で計画路線のほぼ全域の調査を終了していたが、現県道より南側については2筆の水田について



第3図 調査区位置図

用地買収が完了しておらず、調査ができていなかった。この部分について当年度に入って用地買収が完了したため調査を実施することになった。

遺構が存在すると考えられる範囲は、平成元年度の確認調査によって北側1筆分に限定することが可能であった。このため、設定した調査区は南北に細長い三角形を呈している。上層の耕作土は既に社土木事務所によって除去されていたため、その下より約20cmの厚さで機械振削を実施し、以下人力による精査を実施した。

調査の結果、遺構は柱穴58個・土坑7基・溝1条が調査区の南半に集中して検出された。

第4章 A地区の調査

第1節 調査の概要

A地区は合計550m²を調査した。平成元年度調査部分をA-1地区、平成2年度調査部分をA-2地区として表現する。

A地区は与呂木遺跡調査範囲の東端部分に位置している。立地は与呂木の集落が乗る丘陵の北側、即ち北向きの斜面にあたる。地目は水田である。また、周知の遺跡にあたる与呂木窯跡は調査区の北側にある。

A-1地区の現況は段差のある3筆の水田であった。

調査区の基本層序は、第Ⅰ層—旧耕作土、第Ⅱ層—床土、第Ⅲ層—灰色細砂、第Ⅳ層—淡灰色シルト混じり細砂、第Ⅴ層—灰色シルト混じり細砂、第Ⅵ層—褐灰色礫混じりシルトであるが、最上段の水田以外では第Ⅲ・Ⅳ層は削平されている。第Ⅳ層が第1遺構面、第Ⅴ層が第2遺構面を構成する。

A-2地区も現況は水田であり、A-1地区的西側にあたる。

調査区の基本層序は、第Ⅰ層—旧耕作土、第Ⅱ層—黄褐色極細砂、第Ⅲ層—茶褐色シルト質極細砂、第Ⅳ層—淡茶色細砂である。第Ⅲ層を遺構面としている。

第2節 遺構

前述のように、A-1地区では調査区の約3分の1に当たる最上段の水田で上下2枚、他で1枚の遺構面を検出した。

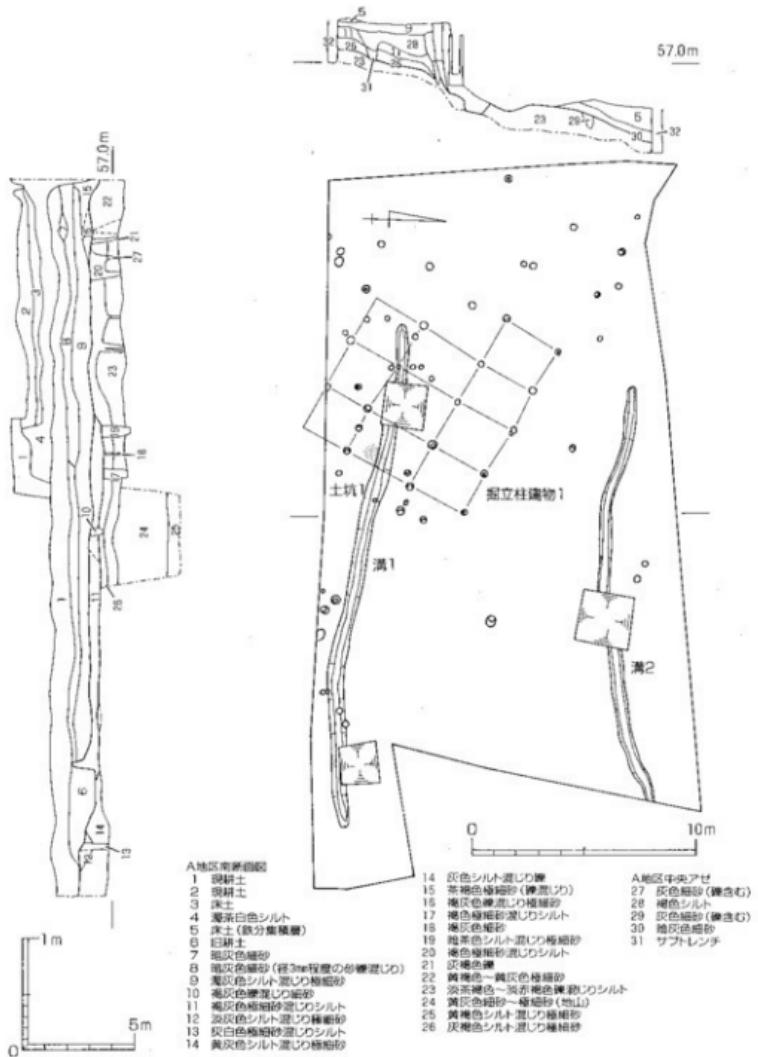
以下、上面を第1遺構面、下面を第2遺構面として記述する。A-2地区で検出された遺構面は、A-1地区の第2遺構面に相当するものと考えられる。

第1遺構面は地表面より約40cm掘り下げたところで検出している。遺構面を覆う第Ⅳ層にはかなり多量の須恵器・土師器・瓦の破片が包含されていた。この面で検出された遺構は溝1だけである。

第2遺構面は調査区全面で検出した。調査区北半では現地表面より約40cm下で、南半では第1遺構面より約10cm下に存在する。この面で検出された遺構にはA-1地区で掘立柱建物1・土坑1・ピット群・溝2、A-2地区では掘立柱建物2・溝3・ピット群がある。

掘立柱建物

掘立柱建物1はA-1地区の南西で検出した。桁は北西方向(N-64°-E)を向いており、



第4図 A-1地区 平・断面図

調査区外に一部延びるものと思われる。桁間4間以上×梁間3間以上の総柱建物である建物を構成する柱穴は直径30cm程度で、残存する深さは10~20cmを測る。柱痕のあるものとないものが混在し、拳大の礫を根石状におさめたものもある。梁方向の柱穴はほぼ直線に並び、柱間は最大2.3m・最小2.0mで残存長は8.4mである。桁方向の柱穴列は西に向かうにしたがって、若干北方向に開き、柱間は最大3.1m・最小2.5mで残存長は8.3mである。

掘立柱建物2はA-2地区のほぼ中央で検出した一部水田造成により削平されている。桁間3間×梁間2間の総柱建物である。建物を構成する柱穴は直径25cm程度で、残存する深さは10~40cmを測る。柱痕のあるものとないものが混在してい

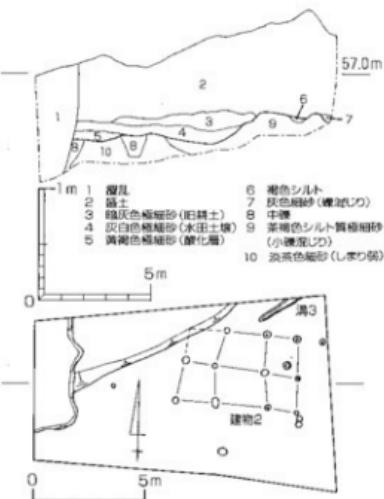
る。梁方向の柱穴列はほぼ直線を呈し、柱間は最大2.4m・最小1.4mで残存長は5.4mである。桁方向の柱穴もほぼまっすぐに並ぶが、柱列が平行を保っているとはいいがたい。柱間は最大1.9m・最小1.5mで残存長は3.4mを測る。掘立柱建物1に隣接している。

土坑

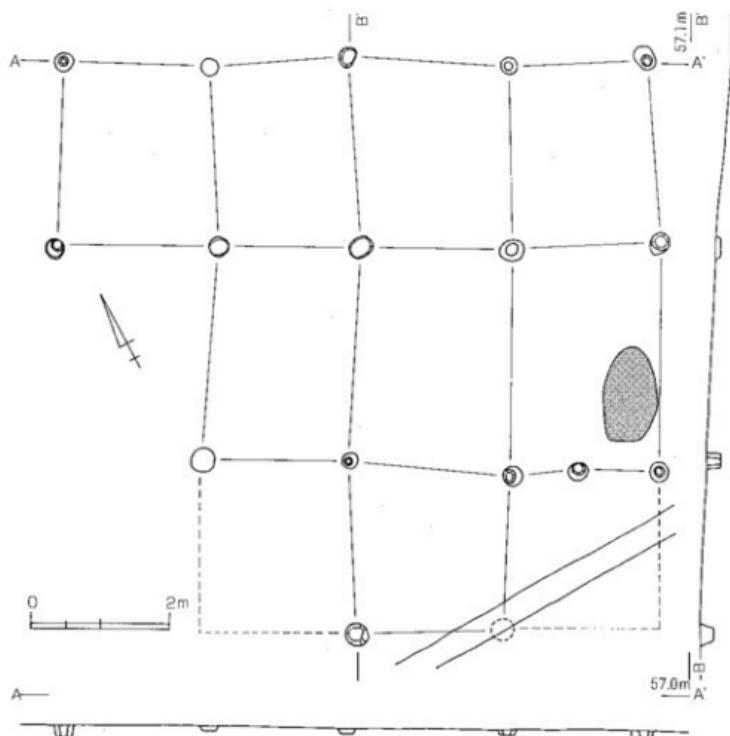
土坑1は掘立柱建物1の東端で検出された。長径約1.3m・短径約0.8m・深さ約15cmを測る楕円形を呈する。埋土は灰色シルト・細砂を含んだ褐色細砂で、炭化物が多く含まれていた。埋土内からは須恵器の小皿・椀・壺と土師器の小皿・皿が合計約100個体出土した。遺物の出土状況は、何枚かの土器が重ねて廃棄された形跡が一部に認められるものの、上下逆転しているものもあり、規則性は認めがたい。

ピット群

A-1地区では調査区西半に集中して検出した。柱痕の認められるものと認められないものがある。直径約20~25cm・深さ25~35cmを測るものがほとんどを占める。埋土内よりほぼ完形の須恵器が出土したもの、壁面に平瓦を貼り付けたものが1基ずつ認められた。しかし、建



第5図 A-2地区 平・断面図



第6図 A-1地区掘立柱建物1 平・断面図

物跡と認識できたものは、前述の1棟だけであった。A-2地区では掘立柱建物2以外にも若干のピットが認められた。

溝

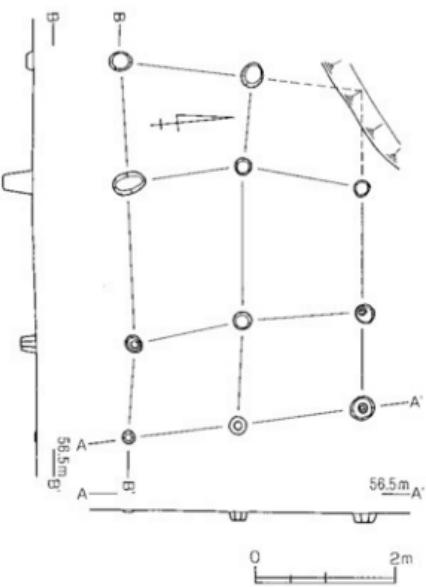
溝1は第1遺構面で検出した。調査区の南端を東西方向に走り、ほぼ等高線と平行している。両端は水田の造成によって削平されているため全長は不明であるが、検出長約23m・幅約0.65m・深さ約0.09mを測る。灰色シルト混じり細砂のベースを掘り込み、埋土は暗灰色細砂であ

る。埋土内より、数点の須恵器・土師器が出土している。

溝2は第2遺構面で検出した。調査区の北端を等高線とほぼ並行して東西に走る。東端は調査区外に浅くなりながら続く。西端は水田の造成によって削平されている。検出長約19m・幅約0.55m・深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色細砂で、埋土内より数点の須恵器が出土した。

溝3は調査区北東隅で検出した。検出長約1.6m・幅0.25m・深さ5~8cmを測り、北東調査区外へ延びる。

いずれも部分的な検出にとどまり、遺物の量も少ないとから性格は不明である。しかし、等高線に沿って走る溝1・2は居住施設に関連する区画溝である可能性が考えられる。



第7図 A-1地区掘立柱建物2 平・断面図

第3節 遺物

与呂木A地区遺跡から出土した遺物としては、土師器・須恵器をはじめとする土器類の他、瓦・土錐が挙げられる。中でも土器集積土坑からは土師器の小皿・皿、須恵器の小皿・椀・壺が一括して検出されている。

包含層出土のものは小片が多いため図化できたものは少ないが、遺構出土ものを中心として、その概要を述べたい。

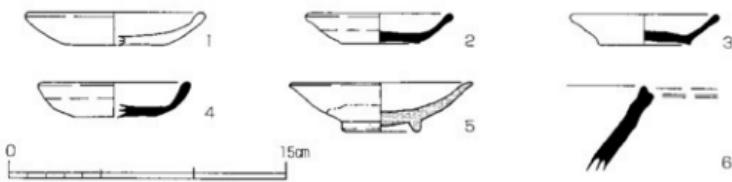
土師器

器種としては小皿と皿が認められる。

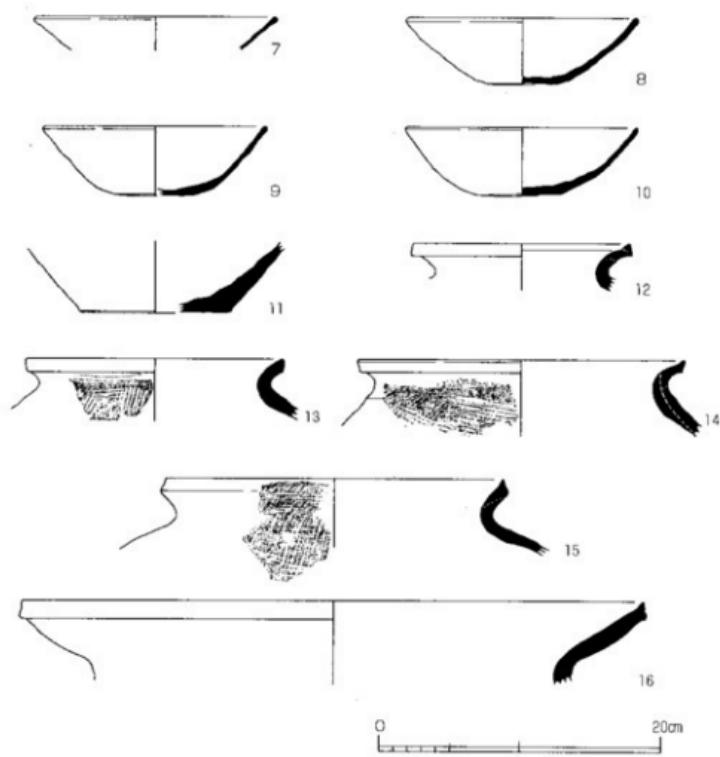
小皿(1・17~82)は法量からみれば、直径8~9cm程度で器高1.7cm前後のものと直径9cm程度で器高2.4cm程度のものがあり、前者がほとんどを占める。整形技法は底部となる粘土塊に粘土紐を巻き付け、回転によるナデで両者を結合させた後、底部を回転糸切り技法を用いて



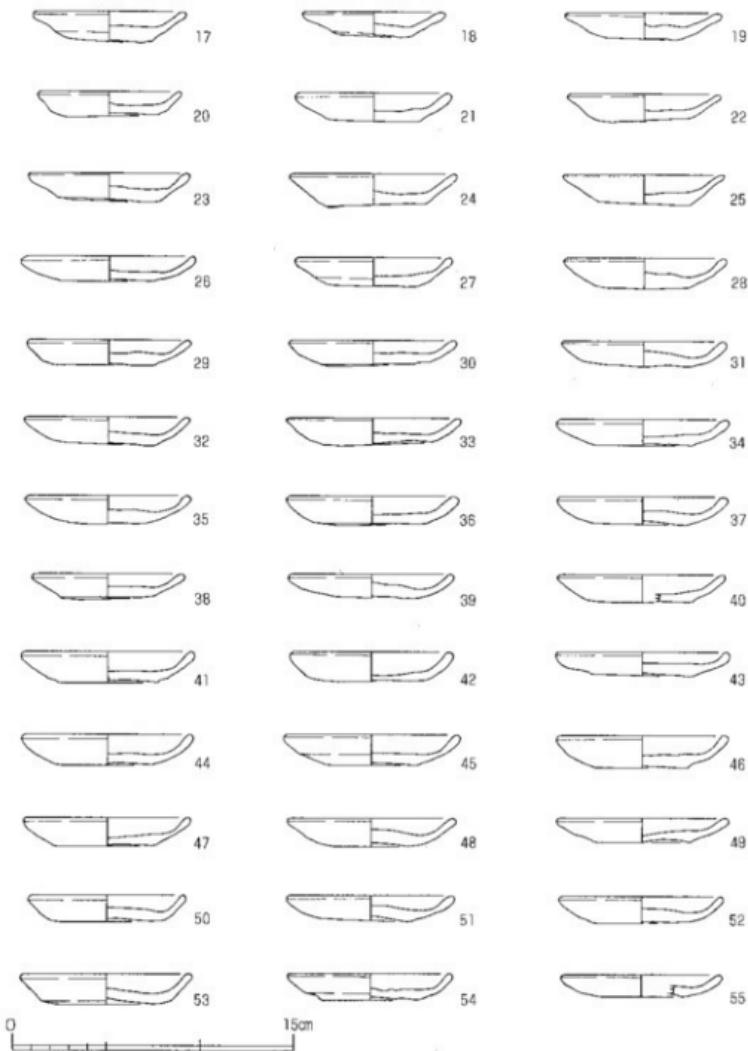
第8図 A-1地区 土坑1 平・断面図



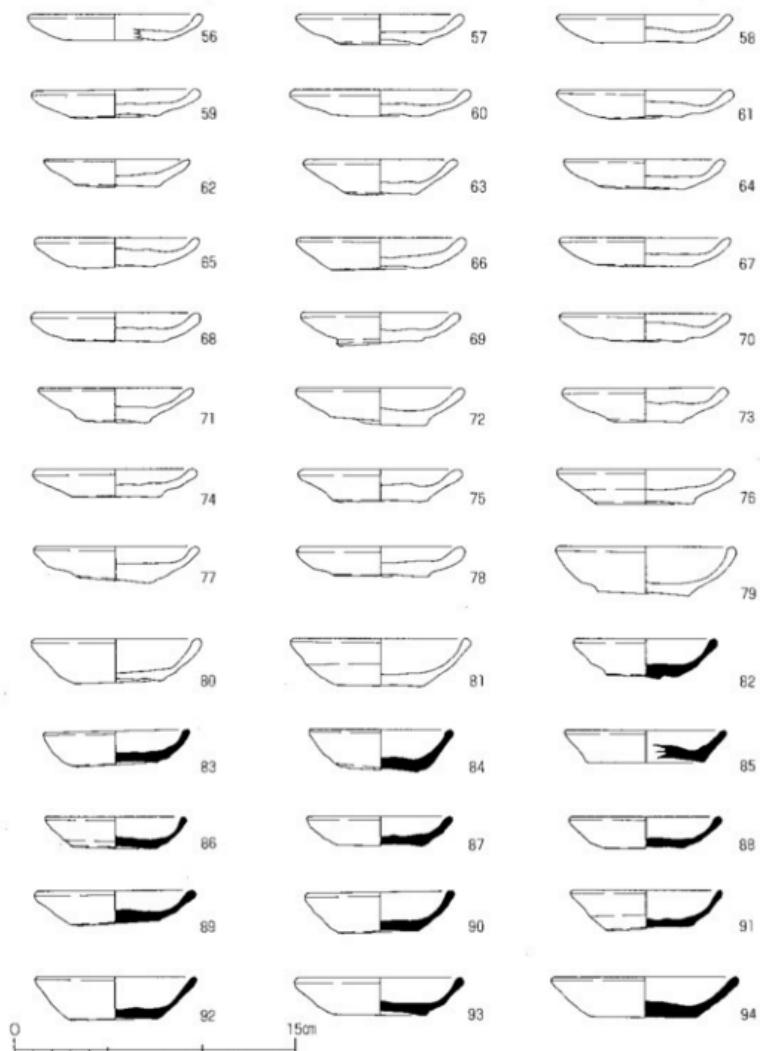
第9図 A地区出土土器(1)



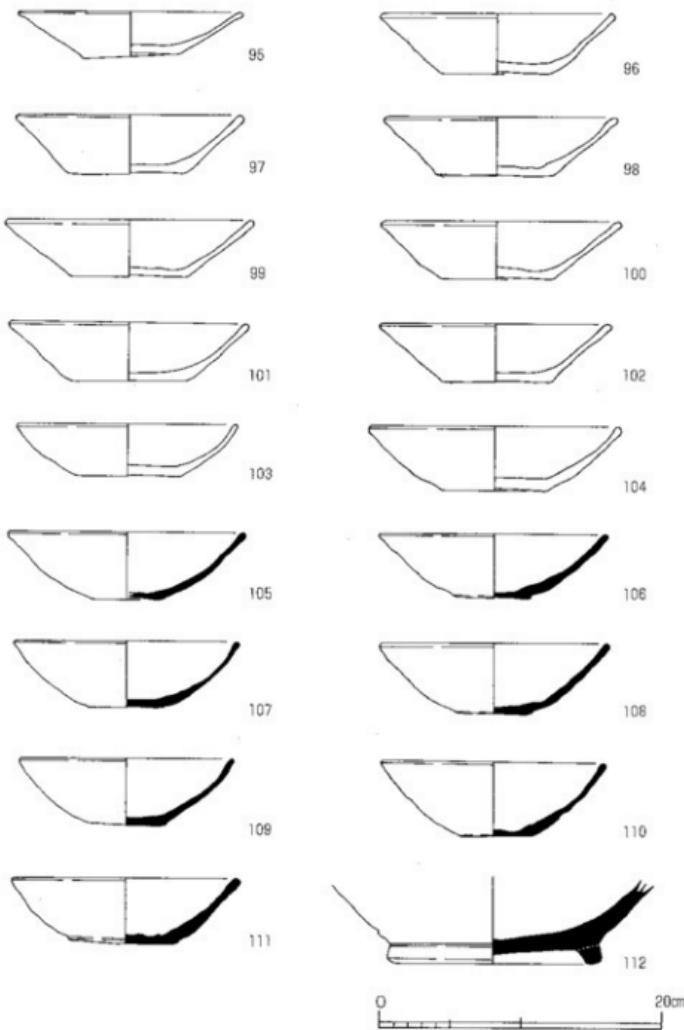
第10図 A地区出土土器(2)



第11図 A地区土坑1出土土器(1)



第12図 A地区土坑1出土土器（2）



第13図 A地区土坑1出土土器(3)



第14図 A地区出土瓦（1）



116



117



118



0 20cm

第15図 A地区出土瓦 (2)

切り離す。胎土は径1~3mmの砂粒が含まれる。体部の形態には口縁が斜め上方に直線的に立ち上がるものと内湾しながら立ち上がるものがあり、底部の形態には平底のものと輪高台を意識したようなつくりのものがある。

皿（95~104）は径15~16cm程度・器高4cm前後のものを中心とする。回転糸切り技法を用いた平底で、口縁が斜め上方に直線的に立ち上がる。整形技法は小皿とほぼ同様であるが、底部内面に板状工具による軽微な回転ナデを施す個体が認められる。

須恵器

器種としては小皿・楕・壺・甕・鉢が認められる。

小皿（2~4・82~94）は包含層・柱穴・土坑1から出土している。直径7~8cm程度で器高は1.8cm程度のものがほとんどであるが、口径が9cmをこえるものもある。形態は土師器の小皿と同様で、整形技法も同じである。

楕（7~10・105~111）は包含層およびピット・土坑1から出土している。口径は12cm前後で器高は3.8cm前後である。形態的に見れば、見込み部に凹みを持ち平高台気味の底部を持つものと、見込み部の凹みが無く平底を呈するものがある。口縁部の立ち上がりは内擣するものと直線的に伸びるもののが混在している。

壺（112）は底部のみが土坑1から出土した。高台を持つもので、底部内面に顕著な磨痕が認められるため、体部が欠けたのち擂り鉢様の使用方法が考えられる。

甕（12~16）は包含層・ピットから出土しており、小片が多いため、全体のプロポーションがうかがえるものがない。青灰色を呈する12~15の口縁部は、頸部から大きく外反し立ち上がる短いもので、端部を若干上方に拡張し、外側に面を持つ。体部整形は平行タタキ技法を使用している。東播系のものと思われ、口径からみるとバリエーションが認められる。16は直線的に開く大型の甕の口縁で、褐色を呈し、他地域からの搬入品か、あるいは時期が下るものであると考えられる。

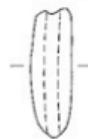
鉢（6・11）は小片がA-2地区の包含層から出土している。6は口縁部で、口径を復元できなかったが、片口の痕跡が認められた。外面には焼成時の自然釉が認められる。11は底部片で、回転糸切り技法が使われている。

陶磁器（5）

包含層より出土した。輪高台を付加した底部から緩やかに立ち上がり外方に開く口縁を持つ小皿である。口縁から体部にかけて白色の釉が施されている。

瓦 (113~118)

包含層および柱穴から出土した。113は軒平瓦片で、瓦当面には巴紋を施している。残りのものは全て軒平瓦で、内面には布目の痕跡が認められる。外面はヘラ状工具によって形を整えた後、ナデを施している。



土錘 (119)

包含層より1点出土した。紡錘形を呈し、一方の端は欠けている。

残存長2.3cm・直径0.8cm・穿孔径0.2cmを測る。



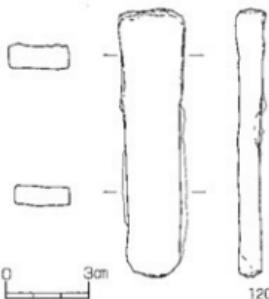
第16図 A地区出土土錘

鉄器 (120)

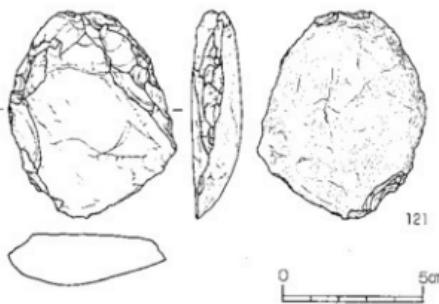
包含層から出土した。長さは9.5cm、幅2cm、厚さ0.8cmを測る。平面形は短冊状を呈し、断面形は長方形である。用途は不明である。

石器 (121)

溝1直上の包含層から出土した。加工痕のある剥片である。石材はチャートである。自然面を残し、剥離面の縁辺部に細かな調整を施している。中世の包含層からの出土であるため、帰属時期は不明である。



第17図 A地区出土鉄器



第18図 A地区出土石器

第4節 小結

A地区では上下2面の遺構面を検出することができた。第1遺構面は存在する範囲も限られしており、出土遺物の数自体も少ない。第2遺構面は調査区全体に広がり、出土している須恵器碗は、神出古窯跡群における森田編年（註）では第Ⅰ期第2段階～第Ⅱ期1段階に属していると考えられ、平安時代末から鎌倉時代初頭にあたる。第1遺構面については、包含層・遺構面の出土遺物からみて、第2遺構面との年代差はほとんどないと考えられる。

遺構の性格については得られた情報が少ないので、中世初頭に営まれた集落の一部を検出したものと考えられる。

遺物では土坑1から出土した土師器の小皿・皿、須恵器の小皿・碗に共通の形態・技法が見られる点が注目される。

註. 森田 稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』（1987）

第4章 B地区の調査

第1節 調査の概要

B地区は与呂木集落が所在する丘陵の西北側斜面の小規模な谷状地にあたる。現況は上下4枚の水田であり、東西両端の水田の高低差は約1.4mを測る。本事業に先立って行った分布調査では最も濃密な遺物の散布をみた箇所である。1次確認調査では坪10・11・31が設定され、柱穴が検出されている。また、第2次確認調査ではトレンチ1・2が設定され、竪穴住居址遺構・溝・柱穴が検出されている。

調査区の基本層序は1.耕土、2.床土、3.灰色極細砂、4.黄褐色シルト質極細砂、5.暗褐色シルト質細砂、6.淡黄褐色極細砂質シルトである。調査区西半部は比較的安定した層序を見るが、東半部は谷部の流れ込みによるためか堆積が乱れており、遺構面にも20cm以上の様が混入している。この箇所は遺構も疎らである。

調査区西端では上下2面の、その他では1面の遺構面を検出した。以下、上面を第1遺構面、下面を第2遺構面として記述している。

第1遺構面は現地表から約50cm掘り下げた所で検出している。第4層黄褐色シルト質極細砂を遺構面として掘立柱建物・溝・土坑を検出している。

第2遺構面は調査区西端部にのみ存在し、第1遺構面から約10cm下で出現する。地山である第6層淡黄褐色極細砂質シルトを遺構面とし、竪穴住居を検出している。

なお、調査中旧石器が採集されたため、調査区内に坪を1カ所設定し、第6層以下の掘削を行ったが、遺構面は確認されなかった。

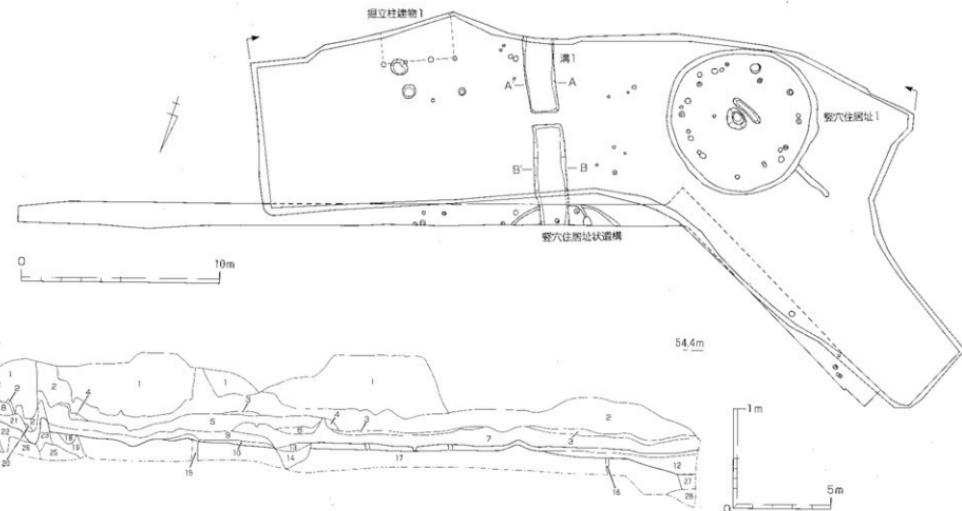
第2節 遺構

1. 竪穴住居址1

B地区中央西寄りで、弥生時代の住居址を1棟検出した。

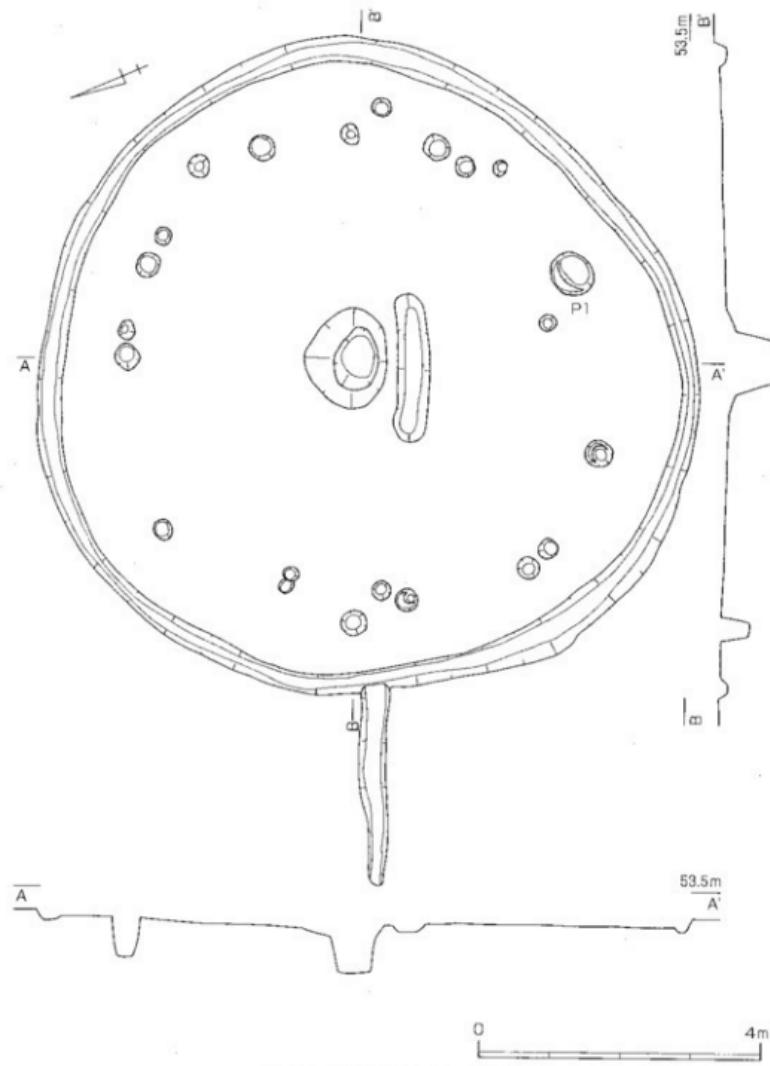
住居址は、直径9.10~9.52mの円形で、床面積は69.0m²（40分の1実測図をプラニメーターにより3回計測した平均値）と比較的大形の住居址である。覆土は0.15~0.20m前後、床面の標高は約53.0mであり、甕や高環脚部、石鏡、石槍、石錐が出土した。

住居の中心には、長径1.40m、短径1.20m、深さ0.60mの中央土坑、その南に接して、長さ2.20m、幅0.50m、深さ0.05mの長椭円形土坑がある。中央土坑は上層に黒褐色土、下層に暗褐色シルトが堆積し、上層より水差形土器半環把手や鐵鏡が出土した。土坑底では、わずかに湧水が認められた。隣接する長椭円形土坑は暗褐色が堆積しており、炭などの痕跡は確認でき



- | | | |
|---------------------|-----------------------|---------------------|
| 1 砂土 | 11 黄褐色シルト質粘土 (疊合) | 21 黄色粘土 |
| 2 粘土 | 12 鈍燥砂シルト質粘土 (劣生者物含む) | 22 鈍燥砂シルト質粘土 (大塊含む) |
| 3 黄褐色粘土 | 13 黄褐色シルト質粘土 (高層) | 23 鈍燥砂シルト質粘土 (疊合) |
| 4 淡灰褐色粘土 (旧耕土) | 14 灰褐色シルト (黄土) | 24 黄褐色粘土 |
| 5 淡灰褐色粘土 (旧耕土) | 15 黄褐色シルト (劣生者物) | 25 黄灰褐色土 |
| 6 反対褐色粘土 (旧耕土) | 16 黄褐色シルト (中耕管理) | 26 黄褐色土 |
| 7 マンガン沈着黄色粘土 (舊物含む) | 17 淡黄褐色シルト質粘土 (上蓋土壤化) | 27 黄色粘土 (疊合) |
| 8 反対褐色粘土 (舊物含む) | 18 黄褐色粘土 (大塊含む) | 28 黄褐色粗砂・大塊 |
| 10 反対褐色粘土 | 19 黄褐色粘土 | |
| | 20 反対褐色中砂 | |

第19図 B地区 平・断面図



第20図 穂穴住居址1 平・断面図

なかった。周壁に内接して、幅0.25~0.35m、床面からの深さは0.10m前後の周壁溝が1条巡らされている。有機物などは検出していない。床面には22個の柱穴が検出され、主柱穴は5~8個程度に復原される。柱穴のうち、P1は直径0.60m、深さ0.70mで、下層より高杯脚部が出土した。その他の柱穴は、直径0.25~0.45m、深さ0.25~0.50mである。

住居址北西部の周壁溝から溝が北西方向に直線的に伸びる。現存長2.80m、幅0.30~0.40m、深さ0.03mである。

住居址1の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期後半~末と考えられる。

2. 穴立住居址状遺構

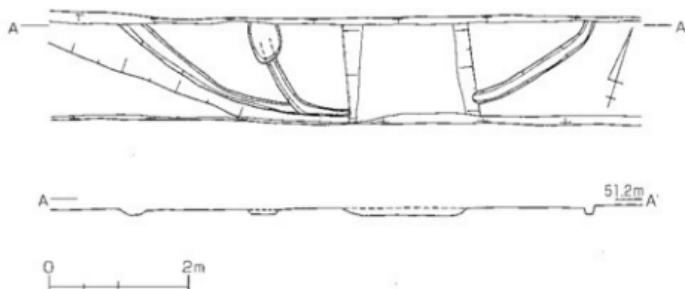
平成元年度の確認調査において検出している。住居址1の北東約6mに位置している。幅約20cm・深さ約12cmのU字溝が円弧を描いて走っている。円弧の中央を南北に貫く溝は溝1にあたる。また、円弧を描く溝と重複する同規模の溝が中央でややL字状に走るが、南端では浅く溜まりと化している。

円弧を描く溝は淡褐色シルト混じり細砂をベースとして掘り込み、埋土は褐色極細砂混じりシルトである。溝内より、土器片・サスカイト片が出土している。

溝の性格は、近接する住居址の形状から推して同様の円形穴立住居址の壁溝である可能性が高い。住居跡とした場合、溝外側で径5mを計る規模の住居が想定できる。ただし、この溝に伴う注穴は検出されていない。周辺で検出されたピットはいずれも溝より上層から掘り込まれたものである。

3. 掘立柱建物・柱穴

掘立柱建物1は調査区東半部の南端で検出した。



第21図 B地区竪穴住居状遺構 平・断面図

東西3間（約4.5m）、南北1間（約2.9m）を検出し、さらに南へ延びる可能性がある。桁・梁の方向は不明であるが南北方向はN-31°-Wを示している。柱間は東西が約1.5m、南北が2.9mを測る。南北は柱間が東西の約2倍となることからさらに柱穴が存在する可能性がある。しかし、削平されたためか検出することができなかった。

建物に伴う柱穴はすべて後述する暗褐色系の埋土であり、規模は径20~35cmの円形で深さ8~12cmを測る。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。

建物の所属時期は柱穴から遺物が全く出土していないため明らかではない。しかし、柱穴の1つが土坑2を切っているため、土坑2よりは新しいと考える。また、溝1と方向をほぼ同じくすることから同時期のもので何らかの関連をもつものと考える。

柱穴群は調査区内に疎らに分布している。調査区中央付近、トレンチ2西端付近では比較的まとまって検出されたものの掘立柱建物・柵列は復元しえない。柱穴は埋土が淡灰色系のもの、暗褐色系のものの2種に大別でき、埋土の色の違いが時期差を示しているものと考える。しかしこれら2種の柱穴に切り合いがなく、共伴する遺物の出土もみられないため、両者の前後関係は明らかにできない。ただ、淡灰色系の柱穴は規模が小さいものが多く、柱痕とみられる木片が残る傾向にあり、近世以降の水田に伴う杭の可能性がある。

また、他の遺構との切り合い関係は溝1に先行するもの、土坑2を切るものがあり、埋土の色から2時期に大別したが、さらにある程度の時期幅を想定することができるであろう。

4. 土坑

B地区で検出された土坑は2基でいずれも第1遺構面で検出した。所謂焼成土坑と呼ばれるものに類似しており、調査区中央から東よりに南北に並んで位置している。北側を土坑1、南側を土坑2とする。

土坑1は平面円形を呈し、径90cm、検出面からの深さ12cmを測る。断面はU字状を呈し、底

には4cm程炭化物が堆積している。

土坑2はやや不定な円形を呈し、径100cm、検出面からの深さ10cmを測る。断面は皿状を呈し、底はやや凹凸がある。土坑1同様底に4cm程炭化物の堆積がみられる。

土坑1・2の性格であるが、両者とも炭の堆積はみられるものの壁面・床面とも火熱による赤化は見られず、また、埋土に焼土の混入もみられないため火を使用する施設という確証は得ていない。所謂焼成土坑の検出例は東播地域では多く、調査地周辺では志染町伽耶院東遺跡（註1）、久留美門前遺跡（註2）で炭を含む土坑の検出例がある。

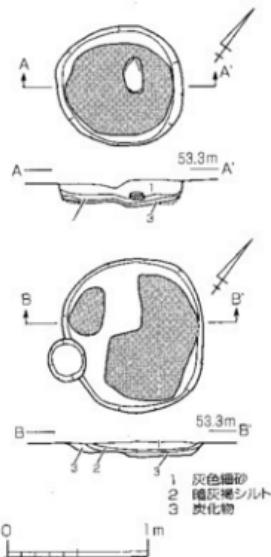
土坑1・2とも遺構に伴う遺物がないため、所属時期を特定することが困難である。ただし本遺跡と美濃川を挟んで位置する久留美門前遺跡で検出されたものは平安後期に属すると想定されており、東播地域で検出された同様の遺構の多くは11～12世紀に属すると推定されている。土坑1・2もほぼこの範囲に含まれるものと考える。なお、土坑2は掘立柱建物に伴う柱穴に切られている。

（註1）三木市教育委員会『平成元年度三木市社会教育活動状況報告書』

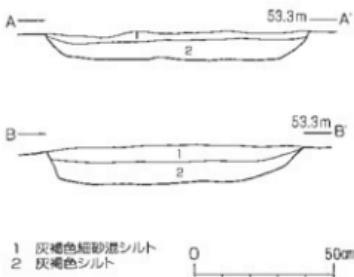
（註2）三木市教育委員会『平成2年度三木市社会教育活動状況報告書』

5. 溝

第1遺構面で検出された。調査区中央付近に位置し、直線的に南北方向に延びている。また掘立柱建物とはほぼ方向と同じくしている。検出長11.8m、幅95cm、深さ10～15cmを測る。断面は逆台形を呈し、グライ化した灰褐色シルトを埋土とする。南北とも調査区外へ延びるが南側は距離を置かずして斜面となるため、さほど延びることはないと考える。また北限も不明であるが、調査区の約12m北側で水田の段差とな



第23図 B地区土坑1・2 平・断面図



第24図 B地区 溝1 断面図

り、ここより北へ延びることはないと考える。埋土内から須恵器片が1点出土したが、細片のため所屬時期は明らかにできない。溝は調査区の中程で幅約1mの陸橋状に途切れる箇所があり、ここが通路として利用されていたとみられる。

溝1の性格であるが、上層で検出された造構はこの溝の周囲にまとまっていること、溝は陸橋部で途切れているため用排水溝として機能しないこと、掘立柱建物とはほぼ同一方向をもつことから、屋敷あるいは集落を区画するものと考えられる。また溝1は沖積地の条里制地割とは方向を異にしているが、これが丘陵斜面に立地しているという地形的な理由によるものと考える。

第3節 遺物

B地区からの遺物の出土は少なく、特に造構からの出土は竪穴住居に伴うもの以外は皆無に等しい。包含層からの出土も少なく、しかも細片が多くいたため、図化したものは3点のみであった。包含層から出土したものは中世の須恵器が多い。また、図化しえなかつたが、確認調査時に平安前期以前と推定される須恵器片が出土している。

包含層出土遺物

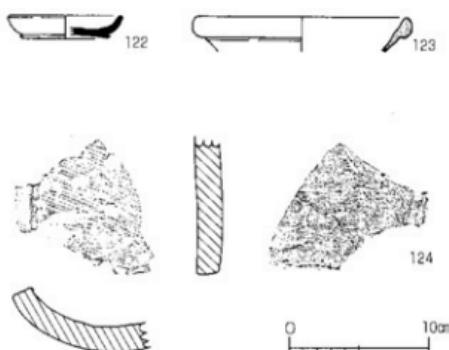
122は須恵器小皿である。口径7.8cm、器高1.6cmを測る。体部は外反し、端部は丸く終わる。体部内外面ともロクロなでを施し、糸切りの底部をもつ。123は白磁碗である。口縁部が1/8のみ残存している。大きな玉縁

口縁を持つ。口径は14.6cm程度に復元できる。124は平瓦である。凸面には叩きを施す。凹面に細かい布目痕跡がある。全体の形は不明であり、付近に所在する与呂木窯址の製品かどうか明らかでないが、12世紀末から13世紀頃のものと考えられる。

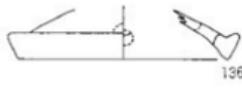
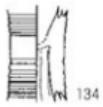
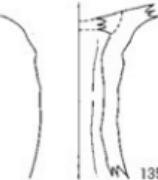
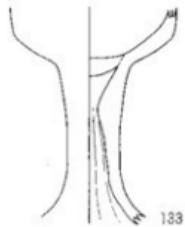
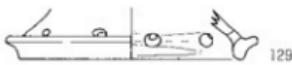
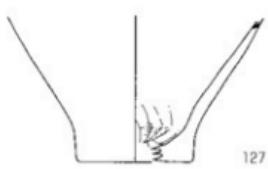
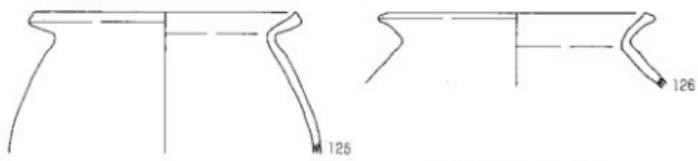
住居址1出土遺物

土器

125から129は、住居址埋土より出土した弥生土器である。



第25図 B地区出土遺物



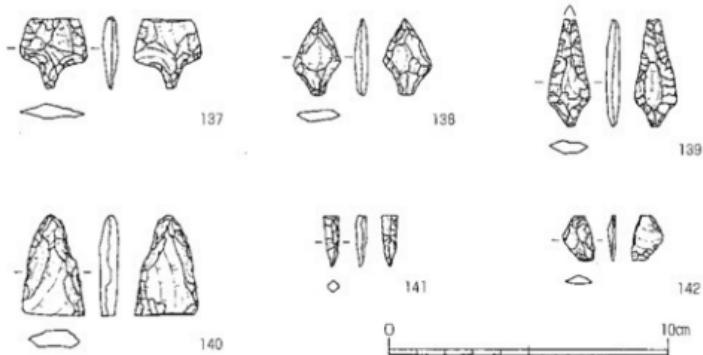
第26図 B地区竪穴住居址1 出土土器

125は強く「く」字形に口頸部が外反する甕で、口縁端部は肥厚して、外端面に沈線の痕跡を残す。口径は、復原で13.9cmである。126は口縁内端部が内側に肥厚し全面をナデで仕上げる。口径は、復原で13.9cmである。127は径6.2cmの平底で、外面は黒変している。128は口径8.3cmの小型の甕である。口縁端部は短く外反し、ヨコナデを施す。129は径13.4cmの脚部である。直線的に裾部が開き、端部は上下に拡張される。裾部内面はヘラケズリを行い、円孔透かしをもつ。

130と131は中央土坑から出土した。130は水差形土器の半環状把手である。現存長は9.25cmで、浅黄橙色を呈する。131は径14.5cmの脚部である。直線的に裾部が開き、端部は上下に拡張される。裾部内面はヘラケズリを行い、円孔透かしをもつ。

132から136は柱孔P1から一括出土した土器である。132は残存状態が悪く、広口壺か器台脚部か判然としない。直線的に開く口径部と肥厚した口縁端部をもち、口径は復原で23.0cmである。133から135は高杯である。133は内側する体部に柱状の筒部から裾部が斜めに開く。外面調整は不明である。134は現存径2.9cmの脚柱部で、外面に2箇所の櫛描沈線文帯がある。136は径12.3cmの脚部である。僅かに外反して裾部が開き、端部は上下に拡張される。裾部内面はヘラケズリを行い、円孔透かしをもつ。

以上の土器は住居址埋土、中央土坑、柱穴から出土したものであるが、帰属時期は4期に特定することが可能であり、大きな時期差は認められない。



第27図 B地区出土土器

石器

6点の石器は、いずれも住居址埋土から検出したものである。

137から139は、サヌカイト製の凸基有茎式打製石鎌である。137は先端部を欠損するが、幅2.45cmの比較的大形の石鎌である。茎は丁寧に作り出されるが、左右対照とはならない。138は完存する石鎌である。長さ2.79cm、幅1.75cm、厚さ0.43cm、重量1.9gである。139は先端部を欠損するが現存長3.85cm、幅15.8cm、厚さ0.49cm、重量2.6gである。調整剥離は先の2点の石鎌と比較して丁寧である。140は現存長3.56cm、幅2.21cm、厚さ0.65cm、重量6.0gのサヌカイト製の石槍である。折損部の下端側面に二次加工の剥離が認められる。141は、頭部を欠損したサヌカイト製石錐である。現存長1.81cm、幅0.55cm、厚さ0.40cmであり、錐部の使用痕跡は認められない。142はチャート製の二次加工をもつ剥片をもつ。

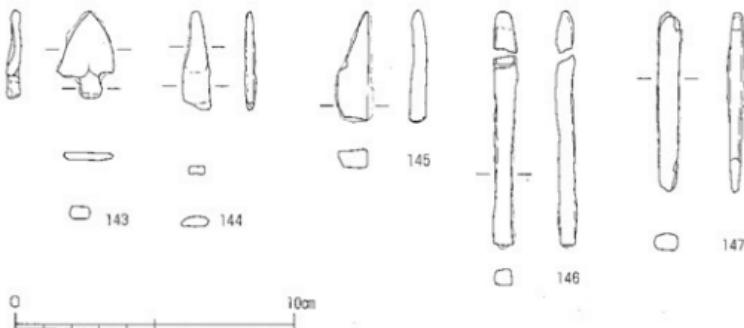
なお、磨製の収穫具や伐採・加工具などは出土していない。

鉄器

143と144は、住居址1の中央土坑から出土した鉄器である。

143は完存する有茎の鉄鎌で、長さ3.15cm、最大幅2.20cmを測る。基部は平基を呈し、厚さは0.30cm、茎部は幅0.80cm、厚さ0.45cmで断面はほぼ長方形となる。石鎌を模倣した製品であると推定され、三田市奈カリ与遺跡に類品が認められる。144は現存長3.50cmの鉄器片である。欠損部は幅1.05cmを測り、上部は次第に幅を狭くして終わる。一部に木質が残存している。なお、143と144の2点に、接合点は認められない。

145と146は、住居址1の埋土から出土した鉄器である。



第28図 B地区出土鉄器

145は現存長3.50cmの鉄器片である。幅1.30cm、厚さ0.70cmである。146は、折損した鉄器片であるが、両者に接合点はない。それぞれ現存長は1.45cmと6.85cmである。断面はほぼ線方形を呈し、基部は垂直に加工され、先端は丸くおさまる。

147はB地区包含層出土の鉄器で、現存長は6.40cmである。

以上の鉄器のうち143から146の4点は、共伴する土器から4期に帰属するものである。

第5節 小 結

調査の結果B地区では上下2面の遺構面があり、第1遺構面では中世、第2遺構面では弥生時代の遺構を検出している。

弥生時代

弥生時代の集落は、三木市東部の北を美嚢川、南を志染川に挟まれた標高100～200mの丘陵の最西端部に位置している。この丘陵は、東に隣接する尾崎神社の付近からは、標高は55m前後を測り、傾斜の緩慢な斜面地となる。また、ここから西の二つの河川の合流地点を結ぶ一帯は、標高50m前後の渥潤な沖積地が展開している。このため、周辺の環境は住居域と生産域が一体となった、完結した小地域として恵まれた立地条件を有しているといえる。

今回調査された住居址は、長径が9mを超える大形の円形住居址と、復原径5mの竪穴住居状遺構のみである。しかし、先の推測が正しいとすれば、調査区の周辺部にまだ数棟の住居址が存在し、集落を形成していると考えて大過あるまい。

わけても、床面積が69.0m²になる住居址1はその中心的存在であろう。住居址1が直径や面積などの数量の点において、同時期の他の住居址のそれを凌駕していることは數的優位性を示している。それのみならず、この住居址が中期後半の段階に確実に複数の鉄器を所有している事実は、質的にもまた充実していたことを教えている。こうした様相は、集落内の住居址間の階層差を知る興味深い資料となろう。

中世

第1遺構面で検出した遺構は掘立柱建物・溝・土坑であり、小規模ながら集落を形成していたものと推定する。遺構は密ではないが、集落の範囲はさらに路線外にも続いている。

各遺構から出土遺物がほとんどないため所属時期を特定することは不可能である。そこでA・C地区で検出した遺構との比較、埋土の状態等から検討しておよそ中世に属すると推定した。また、若干の遺構に切り合い関係が見られることから中世の範囲の中でもいくらかの時期幅を

持つものと考える。しかし、所属時期が明らかでないこと、検出された遺構が少ないとから各遺構の関連及び性格は十分明らかにできなかった。

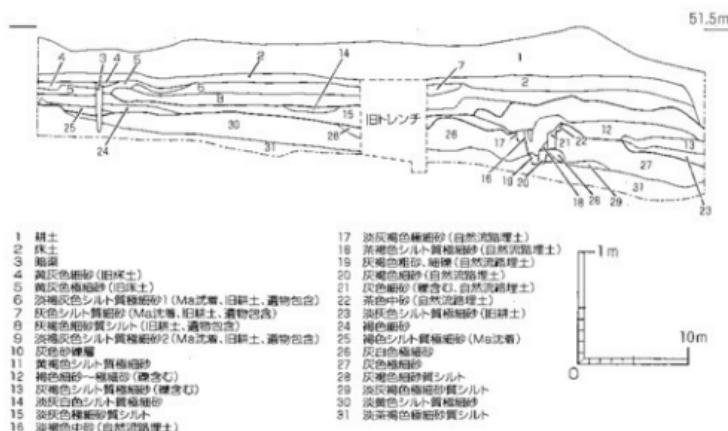
調査区は丘陵北斜面で、しかも谷状地の一部にあたり、生活するのに決して良好な条件とはいえない。にも係わらず集落が営まれているのは、本地区が久留美・志染・細川の各莊園、久留美の窯業地帯、美濃・志染両河川とそれに沿った主要街道を遠望できる立地によるためと推定する。おそらく旧美濃郡内でもこの地は主要な位置を占めることができたのであろう。それは後世秀吉の三木城攻めの際に調査区背後の丘陵上に本陣が設置されたことからも伺い知ることができる。また、丘陵下の沖積地は条里制地割が施行され、古代以降安定した生産基盤になっていたと推定される。前述した弥生時代の恵まれた立地条件は中世でも変わらなかつたと考える。

第6章 C地区の調査

第1節 C-1地区の概要

C-1地区は与呂木集落が所在する丘陵の西側裾付近の水田に位置する。また、与呂木・久留美条里と呼称される条里制地割のほぼ東端部にある。1次確認調査では坪19・20が設定され多量の遺物が出土し、生活面とみられる土壤層が確認された。また2次確認調査では4トレチが設定され、断面で水田畦畔が検出されている。そこで今回これらの坪及びトレチを設定した水田1枚について全面調査を実施した。

調査区の断面観察では現耕土下に数面の中世以降の水田面が存在する。これらの水田土壤層は疊とともに多量の須恵器等の遺物を含んでいる。遺物の出土は南半部が多く、特に東側水田との段差付近に多く見られた。遺物の出土量は北へ向かうにつれ減少し、北端付近では少量の出土しかみられない。遺物の時期は奈良時代から近世初頭と幅を持つが、主体となるのは古代末から中世の須恵器である。付近には窯址群が所在するが、窯より投棄された未完成品と認められるものはないため、調査区の近辺に集落の存在が想定される。



第29図 C-1地区 断面図

調査の結果、遺構面は上下2面存在することが判明した。

第1遺構面は淡灰色極細砂質シルトをベースとし、C-2地区の中世水田面に対応すると考えられる。標高51~51.2m付近に存在し、北側へ傾斜をもっている。畦畔等の遺構は平面で検出することができなかった。唯一検出されたものは南北方向に延びる溝1本である。溝は調査区南西隅付近から中央付近にかけ検出した。C-2地区検出の中世水田面に伴う畦畔とほぼ同方向に延びており、周辺の条里制地割の方向ともほぼ一致する。埋土内に若干の炭化物を含み中世に属するとみられる須恵器片が少量出土している。

第2遺構面はC-2地区検出の下層水田面に対応している面と考える。淡黄色シルト質極細砂をベースとしている。第1遺構面同様北へ傾斜をもち、断面図には現れていないが、北端は礫層あるいは黒色シルト層となっている。上面同様土壤層は認められるものの、平面で畦畔を検出することができなかった。なお、調査区北半部で東西方向に延びる流路を1本検出してい。流路は主に砂礫を埋土とし、埋土内より弥生土器か土師器とみられる細片及びチャート製石核が出土している。これらはいずれも丘陵上からの流れ込みによるものとみられる。

第2面遺構面直上からは須恵器甕、弥生土器甕等が出土している。甕は団化しえなかつたが、丁寧な波状文が施され、下半にタタキが認められており、6世紀代に属するものとみられる。また、第2面以下のサブトレーンチ掘削では須恵器片の出土を見ず、弥生土器あるいは土師器破片のみが出土することから、この面に対応する水田は6世紀以前に属するものと推定することができる。

第2節 C-2地区の概要

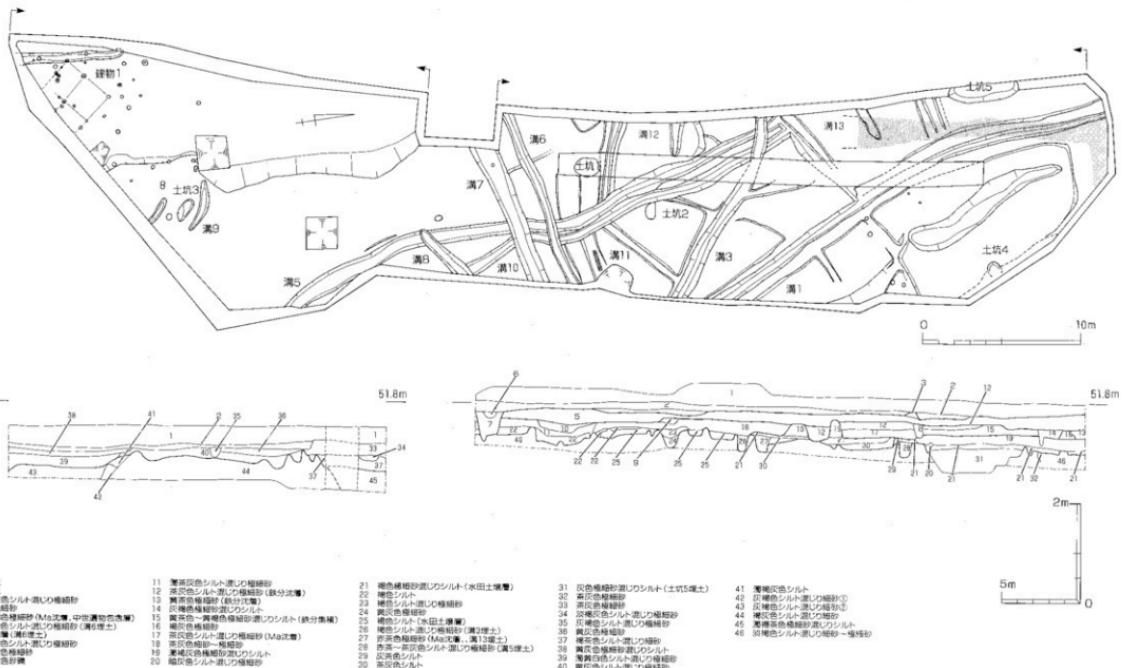
C-2地区は現県道より北側に伸びる南北約70m・東西幅約15mの不整形な台形状の調査区である。C-1地区とは間に幅約2メートルの道路を挟み南に位置する。

調査区は大まかに上下4枚の水田もしくは畑地に分かれる。このうち、南西半の水田が1段低くなってしまい、現況の地形を特徴づけている。

調査の結果、中世の建物1棟・柱穴群・土坑・溝、古代末から中世と考えられる溝・水田畦畔、弥生時代中期以降古代末までの間に収まる水田遺構（溝・畦畔）、弥生時代中期の土坑を検出した。

調査区の基本的な層序は、上層より第I層—耕作土・第II層—床土・第III層—茶褐色極細砂・第IV層—黄褐色極細砂混じりシルト・第V層—灰褐色極細砂混じりシルト・第VI層—茶灰色極細砂混じりシルト・第VII層—褐色極細砂・第VIII層—焦げ茶色極細砂・第IX層—黄灰色シルト混じり極細砂・第X層—褐茶色シルト混じり細砂・第XI層—礫層の順である。

最下層より出現する第XI層は現集落の乗る丘陵裾部を被覆する礫層である。手指状に起伏



第30図 C-2地区 平・断面図

を持っている。第Ⅹ層は第Ⅺ層の凹凸を埋没させる洪水堆積である。第Ⅸ層は第Ⅷ層上に堆積し、南西方向に若干傾斜しつつ広く出現し、調査区内では安定したベースを形成している。第Ⅶ層上に堆積する第Ⅵ・Ⅴ層はともに水田土壌である。調査区の北中半部に広がる溝・畦畔はこの2枚の水田土壌に由来している。調査区の南西半では、近世以降の水田造作による削平を受けており遺存していない。これは第Ⅲ～Ⅵ層についても同じである。

水田土壌と溝・畦畔の関係については、第Ⅶ層の水田土壌には溝1・溝5・溝10・溝13及び溝に取り付く畦畔が対応している。第Ⅶ層の水田土壌には溝3・溝12及び溝に取り付く畦畔が対応すると考えられる。

また、弥生時代中期の土坑4・5は第Ⅶ・Ⅵ層が被覆しており、第Ⅶ層を弥生時代中期の遺構面として捉えることができる。

第Ⅶ層は水田土壌と考えられ、畦畔（水田遺構A）を検出している。第Ⅶ層を被覆している第Ⅴ層中には古代末の遺物を包含している。

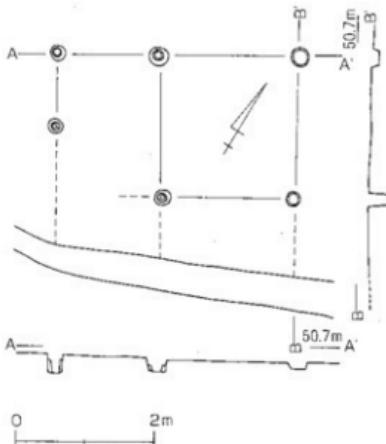
第Ⅲ層中（土層図5）には中世の遺物を包含しており、第Ⅳ層（土層図12）上において溝（6・7）・集石土坑を検出している。第Ⅳ層もまた水田であったと考えられる。

第3節 遺構

調査の結果、中世の建物1棟・柱穴群・土坑・溝、古代末から中世と考えられる溝・水田畦畔、弥生時代中期以降古代末までの間に収まる水田遺構（溝・畦畔）、弥生時代中期の土坑を検出した。遺構として図示し得たものは全てC-2地区において検出されたものである。

掘立柱建物・柱穴（第30・31図）

掘立柱建物IはC-2地区南西端に位置する。東西2間分・南北1間分を検出した。東西柱列のN-31.5°-Wにとる。柱間は東西が2.00mと1.48m、南北が2.00mを測る。柱穴の形状は円形で径約25cm、深さは10cmから30cmを



第31図 C-2地区掘立柱建物I 平・断面図

測る。また、柱痕跡を残す柱穴は3箇所、柱痕径約12cmを測り、1個の柱穴には根石と考えられる石が検出されている。

建物の時期は柱穴内の遺物及び上面に被覆する包含層も遺物から推測して、鎌倉時代と考えられる。

ピット群

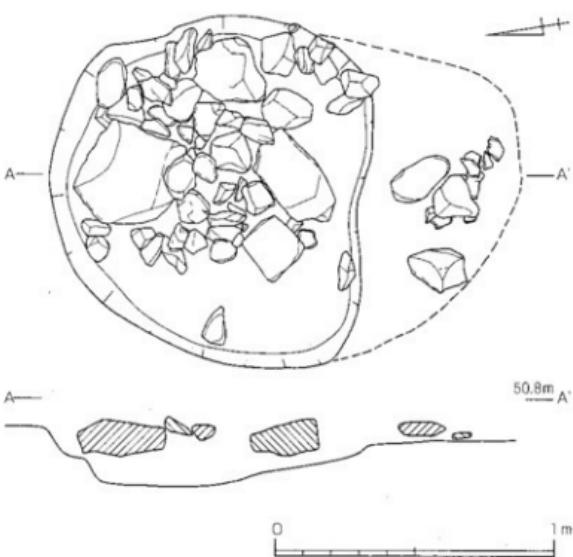
建物1の周辺に30個のピットが検出されている。ピットには、埋土に

炭化物を含むもの、根石を持つものが見受けられる。このうち、P5～P12は約2.10mの間隔をおいて南北・東西に一列(柵状)に並ぶ。P3～P4より西側については特に後世の水田造成による削平が激しく、柱穴が消滅している可能性が高い。方位をN-15°-Eにもった掘立柱建物が存在した可能性がある。遺構の時期は被覆する包含層より須恵器坏(150)が出土しており平安時代前半と考えられる。

土坑

土坑1(第32図)はC-2地区中央西より検出している。平成元年度の確認調査時に、ほぼ全体を検出していたが、精査は当年度に行った。

土坑の形状は不整な楕円形を呈しており、長径約170cm・短径約130cmを測る。深さは約40cmで箱形に掘られている。土坑は床土直下より掘られており、淡灰褐色シルトを埋土としている。土坑底からは拳～人頭大の石が密集した状態で検出されているが、組まれた状態ではなく、投入もしくは土坑底に敷いた状態である。石の一部には火を受け、剥離した状態のものが見られた。遺構の性格は不明であるが、遺物は須恵器片が集石間より出土しており、土坑が掘り込ま



第32図 C-2地区土坑1 平・断面図

れた層位を勘案すれば時期は中世に属するものと考えられる。

土坑4はC-2地区北東端において検出している。東半が洪水砂によって削られているため形状は詳らかではないが、鉢状の断面形状をもった、径85cm・深さ16.5cmの不整な円形の土坑が想定できる。土坑埋土は灰褐色、土坑底より弥生土器壺底部が出土している。時期は弥生時代中期と考えられるが、遺構の性格は不明である。

土坑5はC-2区北西端において検出している。西半が調査区外にあるため形状は詳らかではないが、軸を北北東にもつ長径約1.80m・短径0.80m・深さ25cmの不整な橢円形の土坑が想定できる。土坑埋土は暗灰褐色、底より高坏(15)が出土している。時期は弥生時代中期と考えられるが、遺構の性格は不明である。土坑5は水田土壤に被覆されており、今回検出した2枚の水田に先行するものである。

溝6・7(第30図)

調査区中央を並行して東北東から西北西へ走る溝である。ともにN-77°-Eの走行をもつ。溝6は幅約60cm・深さ約40cm、断面形は溝浚えによって一部が突出した不整な形状を呈している。また、溝7は幅約120~50cm・深さ約40cm、断面形は弓形を呈している。埋土は茶灰色シルトである。ともに、前述したごとく、第V層を肩部として掘り込まれているが、溝7は下層に同方位の溝が重なっている。この溝は第V層を切って造られており、上半に砂が堆積し、下半は褐色シルトを埋土としている。規模は約170cm・深さ約20cm、断面形は弓形を呈している。

水田遺構A

調査区の北半において検出した。畦畔は南北方向(N-10°-E)に走行をもち、調査区端で東西方向の畦畔が取り付いている。畦畔の幅は約1.50m、残存する高さは約10cmを測る。前述したように第VI層を構成土としており、古代末前後の時期の水田遺構であると考えられる。また、調査区南端で検出している溝14及びC-1地区において検出した流路はその走行を同じくしており、同時期の水田に伴う溝の可能性がある。

水田畦畔B(溝3・溝8・溝12)(第30図)

調査区の中央部で検出している。第VII層を構成土として、北西方向もしくはそれと直交に近い方位をもつ溝及び溝に取り付く畦畔である。

溝3はN-50°-W前後の走行をもち、幅約90cm・深さ約25cm、断面形は逆台形を呈している。埋土は褐色シルトである。溝脇では部分的に幅約20cmの畦畔を検出することができた。溝5・溝10と切り合い、後出する。

溝08はN-55°-E前後に走行をもち、幅約80cm・深さ約10cm、断面形は弓形を呈している。

埋土は淡灰褐色シルト質極細砂である。溝10と切り合い、後出する。

溝12はN-72°-W前後の走行をもち、幅約80cm・深さ約10cm、断面形は逆台形を呈している。埋土は褐色シルトである。溝の両肩には部分的に幅約30cmの畦畔を検出することができた。

水田畦畔C（溝1・溝5・溝10・溝13）（第30図）

調査区を斜めに縱断して検出されている。第Ⅲ層を構成土として、北北西方向もしくはそれと直交に近い方位をもつ溝及び溝に取り付く畦畔である。

溝1はN-6°-EからN-17°-W前後の走行をもち、幅約80cm・深さ約25cm、断面形は逆台形を呈している。埋土は褐色シルトである。溝の両肩には幅約50cmの畦畔が存在し、小畦畔が取り付いている。

溝5は溝10と並行して走る溝である。N-17°-W前後の走行をもつ。幅約80cm・深さ約20cm、断面形は浅い弓形を呈している。埋土は褐色細砂である。

溝10は溝5に並行して走る溝である。溝5に後出するが同様の走行をもつ。幅約80cm・深さ約20cm、断面形は浅い弓形を呈している。埋土は灰色シルト質極細砂である。

溝13はN-57°-E前後の走行をもつ。幅約80cm・深さ約15cm、断面形は逆台形を呈する。埋土は赤茶色極細砂である。南肩には溝5・溝10が取り付き、北肩には幅約50cmの畦畔が存在している。

第4節 出土遺物

C地区出土遺物のうち包含層出土の遺物はすべてC-1地区から出土したものである。遺物は弥生から近世初頭まで幅を持つが、図化したのは極一部にすぎない。他には須恵器壺・壺・甕・鉢、土師器鍋等が出土している。C-2地区は包含層が薄く遺物出土量は少ない。しかも細片が多くいため、唯一チャート製剝片を図化したのみである。

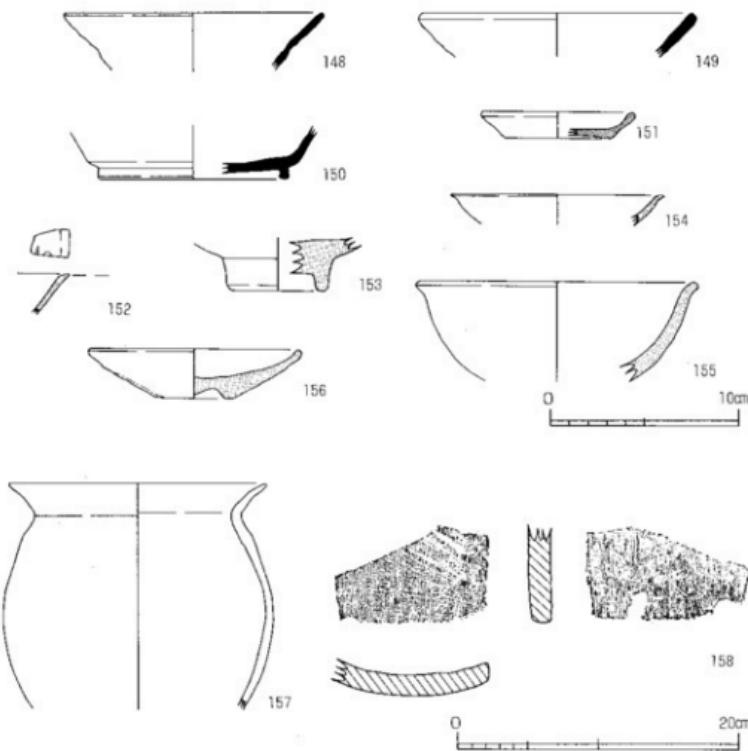
遺構出土の遺物はすべてC-2地区からのものであるが、やはり細片が多く図化したのは6点にすぎない。特に調査区南端の柱穴・溝からは比較的遺物の出土をみたが、図化したのは2点のみであった。

包含層出土遺物（第33図）

148~158は包含層出土の遺物である。148・149は須恵器壺である。148は復元口径13.7cmを測る。口縁はやや外反し、端部は比較的シャープである。内外面ともロクロナデがみられる。149は復元口径14.3cmを測る。内外面ともロクロナデがみられる。体部はほぼ直線的であるとみられ、端部は丸く終わっている。150は須恵器壺である。ほぼ直立する高台を持つ。

151は瓦器小皿である。残存部が少ないが体部内外面ともロクロナデが認められる。

152～155は青磁碗であり、すべて中国製である。中世初頭のもの（152・154）と中世後期のもの（153・155）に分けられる。152は口縁部が若干残存しているのみであるが、灰白色の釉を施し、片切彫文が認められる。153は比較的高く、直立する高台を有し、内外面に厚くオリーブ灰色の釉を施す。高台底部は露胎している。断片を見る限り文様は認められない。154は口縁部が1/10残存し、口径は11cm程度に復元できる。口縁部は端部は外反し、丸く終わる。内外面とも灰白色の釉を施している。155は口縁が1/8 残存し、口径は14.6cm程度に復元できる。器厚は厚く内外面とも厚く明緑灰色の釉を施す。



第33図 C-1地区出土遺物

156は唐津焼皿である。高台に胎土目の痕跡がみられ、慶長年間以前のものとみられる。

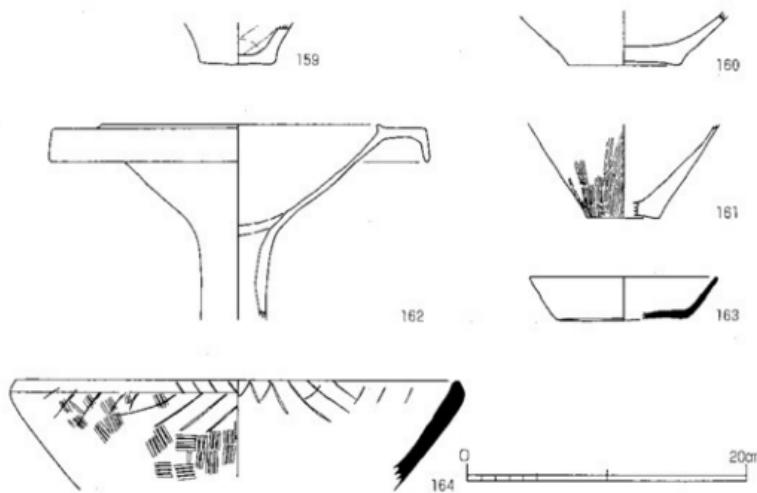
157は弥生甕である。復元口径17.8cmを測り、口縁はくの字に屈曲し、端部はやや外反して終わる。体部には不明瞭ではあるが、タタキの痕跡が認められる。

158は丸瓦である。凹面は糸切り痕跡が認められ、その後端部付近はナデを施している。12世紀末から13世紀頃のものと考える。

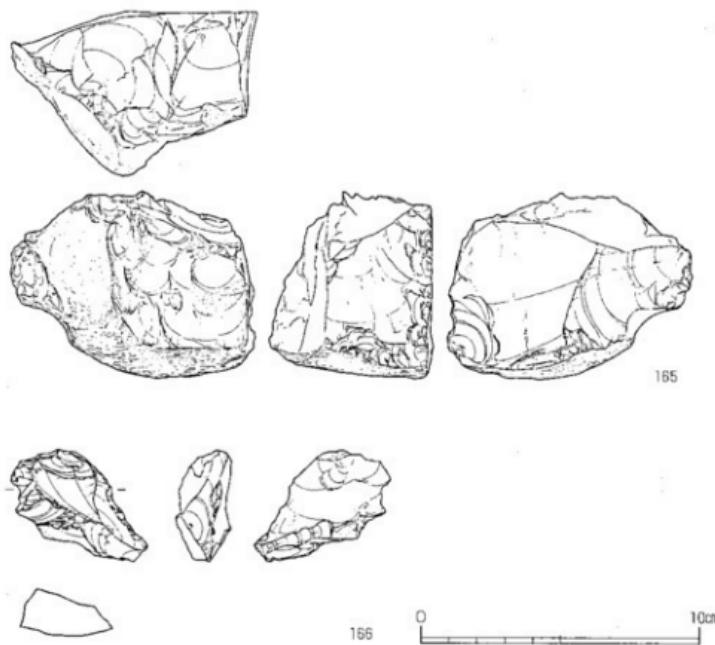
遺構出土遺物（第34図）

159～161は弥生時代の甕の底部である。159はC-2地区水田面、160・161は土坑4より出土している。160は磨滅のため内外面とも調整は不明である。161は外面が黒褐色を呈し、タテ方向の刷毛目調整が認められる。162は土坑5より出土の水平口縁の木器模倣高杯である。坏部のみ残存している。口径19.3cmを測る。表面は磨滅しているため、調整は不明である。いずれも畿内Ⅳ様式に併行するとみられる。

163は溝09より出土した須恵器坏である。体部内外面とも回転ナデが認められる。口径13.0cm、器高3.1cmを測る。164は柱穴より出土した須恵器鉢である。復元口径31.45cmを測る。



第34図 C-2地区出土土器



第35図 C地区出土石器

口縁端部内面は櫛描の後横方向のナデを行い、外面はタタキ、ナデの後櫛描を施す。体部外面はヨコ方向のタタキの後タテ方向のタタキを施す。

石器（第35図）

165はC-1地区自然流路内より出土した赤チャート製の石核である。亜円暈を分割して初期の剥片剥離作業が始まっている。目的剥片は1枚しか剥離されていない。固定した打面と剥片剥離作業面を持たず、適宜それらを転移している。166はC-2地区包含層より出土した赤チャート製の剥片である。不定形な剥片の右側片に使用痕が残り、腹面右には長く桶状剥離が認められる。165・166とも中国山地内の石器文化の系統のものとみられる。

第5節 小結

C地区で検出された遺構の性格を特徴づける主な部分として、C-2地区で検出された数時期にわたる水田遺構が上げられる。

水田は弥生時代中期から古代末・中世とそれぞれの時期を想定している。このうち、水田遺構B・Cについては遺構に直接伴う遺物の出土がなく、現状では遺構の先後関係による弥生時代中期から古代末とした非常に漠然とした時期が提示できるに止まった。但し、今一步踏み込んで述べておくならば、丘陵からの傾斜に沿って水田区画が存在し、条里区画としての企画性は見受けられない点、1水田区画が検出した畦畔の状況から推測する限り狭隘である点、また水田土壤中から出土した遺物は少量であるが、古墳時代前期以降の遺物が含まれていない点から見て弥生時代中期から後期の時期の水田である可能性が高い。

古代末の時期が考えられる水田遺構Aは真北に近い方位をとっており、周辺の条里地割との関連を考える上で興味深い資料である。

第7章 D地区の調査

第1節 調査の概要

D地区は三木市与呂木194-2に所在し、地理的には志染川右岸の河岸段丘上に立地する。この河岸段丘は、A・B地区の立地する平井山の南麓にあたり、現在この上には与呂木の集落が立地している。

工事によって既に耕土を除去してあったため、調査にあたっては、その直下から機械掘削を実施し、順次人力による遺構検出・掘削を行った。

今回の調査区は、南方の志染川に向かって若干低くなる水田部分にあたり、遺構検出面にも南北方向に低くなる傾斜が認められた。

遺構は調査区南半に集中し、柱穴58個、土坑7基、溝1本が検出されたため、集落遺跡の一部にあたっていると考えられる。

これらの遺構は、旧床土層（6層）下面で検出されたものが多く、水田造成時に当時の生活面を削平したり、溝（溝1）を人為的に埋めて平坦にしていることが確かめられた。

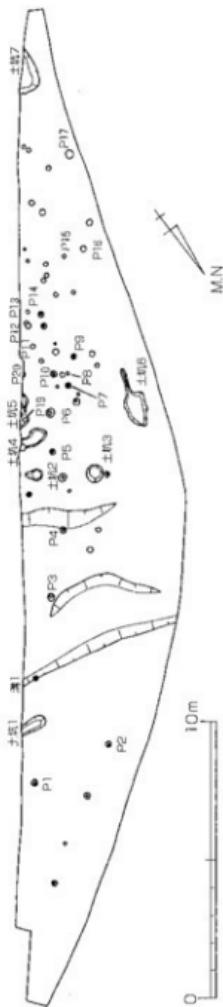
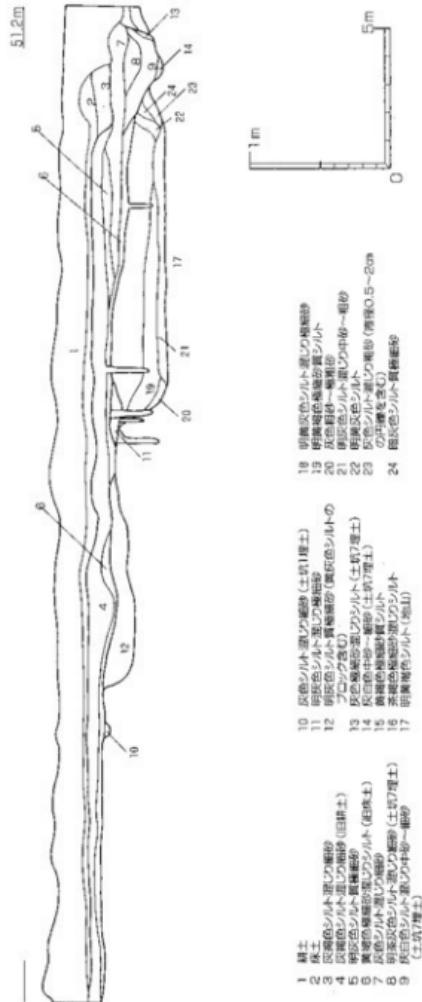
これらの遺構から出土した土器は極めて少なく、16世紀後半の土師器釜の出土した土坑3を除けば、時期の特定が困難なものが多い。ただし、これらの遺構は単一時期に営まれたものとは考えがたい。土層堆積状況の観察からは、切り込み面の異なる遺構が存在することが確かめられたし、その結果と考えられる柱穴深度の違いも確認できるため、これらはいくつかの時期にわたる遺構群と捉えられそうである。

また、柱穴の深度および柱痕の有無を確認するために断ち割り調査を実施した。その際に、21層より弥生時代後期の土器（169）が1点出土したため、遺構面より下層における土層堆積状況、ならびに遺構の有無を確認する必要が生じた。調査区南半部東壁沿いで行った深掘り調査の結果、中世遺構面の下層に、深さ約40cmの落ち込みが存在することが判明した。この落ち込みは弥生時代後期以前の自然地形と判断され、落ち込み底面においても新たな遺構は検出されなかった。

第2節 遺構

約100m²の調査区の主に南半部において、柱穴58個、土坑7基、溝1本が検出された。

これらはいずれも居住に関わる遺構ばかりであり、調査区は中世を中心とする時期に営まれた集落の一部分に該当していることが分かる。



第36図 D地区 平・断面図

第1表 D地区 主要柱穴の深度一覧表

遺構名	深度cm	遺構名	深度cm	遺構名	深度cm	遺構名	深度cm	遺構名	深度cm
柱穴1	25	柱穴5	40	柱穴9	29	柱穴13	39	柱穴17	28
柱穴2	31	柱穴6	28	柱穴10	29	柱穴14	30	柱穴18	30
柱穴3	31	柱穴7	30	柱穴11	39	柱穴15	30	柱穴19	30
柱穴4	32	柱穴8	25	柱穴12	33	柱穴16	31	柱穴20	29

1. 柱穴

柱穴の掘り方は直径20~30cmの円形を呈するものがほとんどである。深度については、第1表に主要なものを示した。これ以外の柱穴はすべて25cm以下のもので、深さ10cm前後のものが多い。ただし、この深度は、本来の生活面が削平されていることから、残存した深さを示すものである。

これらの柱穴群のなかには、複数の柱穴が列状に並ぶもののが存在することから、掘立柱建物あるいは柵状遺構を構成するものが含まれていると考えられるが、調査区が狭いため、建物等を復元することはできなかった。

また、柱穴6の柱廻り土からは、直径5cm程度の焼土が数点出土しているほか、柱穴1・2・3・6・8・11・12・17などから土器が出土している。なお、土器はいずれも細片であり、図化できたのは2点のみである。

2. 土坑

土坑は深さ10cm程度の浅いものが多い。また、分布のあり方に規則性は認められず、埋土も一層のものがほとんどである。

土坑3は直径58cm、深さ60cmの円形の土坑であり、埋土に焼土や炭片を多く含むことが確かめられ、焼土を多く含む中層からは土師器釜(168)が出土している。

また、土坑1・7からは土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小片であり、詳細は不明である。土坑6からは、柱穴6同様の焼土塊が数点出土した。

3. 溝

溝1は、用排水路や屋敷の区画を示す溝などではなく、自然地形の可能性が高い。先述したとおり、後世の水田造成時に人為的に埋められていることが埋土の観察から判明した。

第3節 遺物

出土した遺物は、いずれも小片であり、その量も少なく、セキスイコンテナ T S 28に1箱であった。

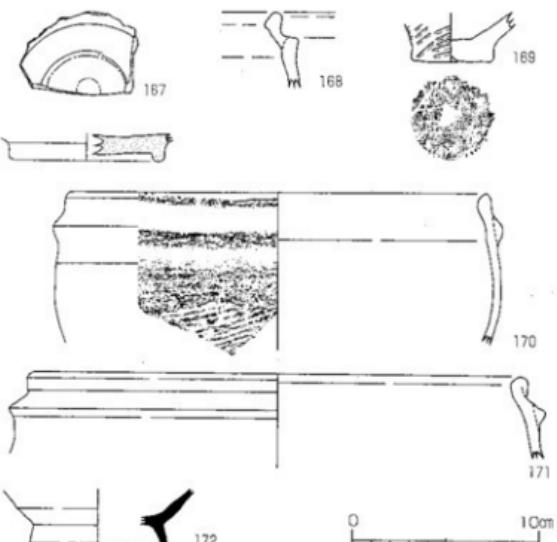
包含層出土遺物 遺構面よりも上層で出土した遺物には、須恵器甕・小皿・椀、土師器釜、青磁皿などが挙げられ、遺構面より下層の深掘り作業で出土した遺物には弥生時代後期の土器がある。

口縁部の小片のため図化できなかったが、12世紀代のものと考えられる須恵器椀が出土している。

167は、いわゆる龍泉窯系とされる青磁皿である。全面に厚い灰オリーブ色の釉をかけるもので、見込みと、高台内側の釉を輪状に掻き取っている。これらの特徴から15世紀を前後する時期の所産と考えられる。また、高台と体部の境には、人為的に打ち欠いた痕跡が認められ、いわゆる面子として再利用されているようである。

168は土師器の釜である。鋤部の成形を貼り付けではなく、積み上げによって行うもので、鋤部の端部は尖りヨコナデ調整は体部前面から鋤部下方の外面にまで及んでいる。16世紀後半に位置づけられる資料である。

169は弥生時代後期の甕の底部の破片である。底部外面には木の葉の圧痕が認められ、体部の調整は、外面を右上がりのタタキで、内面はいわゆるクモの巣状のハケで仕上げている。



第37図 D地区出土土器

土坑3出土遺物 埋土中層より、土師器釜の体部上半の破片が出土した。170は鋸部を貼り付けによって成形し、鋸の先端は尖っている。ヨコナデ調整は体部内面から鋸部下方の外面にまで及んでいる。16世紀後半のものと考えられる。

柱穴1出土遺物 171は口縁部端部が外方に拡張している。鋸部は貼り付けによって成形し、その先端は尖っている。ヨコナデ調整は体部内面から鋸部下方の外面にまで及んでおり、16世紀後半の所産と考えられる。

柱穴17出土遺物 172は須恵器の椀である。高台をもつもので、10世紀後半頃に属するものと思われる。

第4節 小 結

時期を決定するには良好な資料ではないものの、出土した遺物の検討によれば、遺構面の時期の下限を弥生時代後期、上限を16世紀後半に位置づけられそうである。

ここに當まれた遺構は、平安時代中期に属するもの（柱穴17）から、16世紀後半に属するもの（土坑3）まで、かなりの時期幅をもち、長期にわたり居住域として利用されたことが分かる。

D地区で検出された中世集落の広がりについてであるが、北接するC地区の南端部において柱穴などが検出されているため、これを北限としてよさそうである。なお、以下は推測の域を出ないが、地形的な判断によって、D地区より西および南方向には大きく集落の範囲が広がっているとは考えがたく、調査区東側の現与呂木集落付近を当時の集落の中心部分として想定してよいのではないかと思われる。

第8章 まとめ

現在の集落が位置する丘陵の北・西・南の縁を巡るように今回の調査は行われている。

A～D地区の調査地点はそれぞれがかなり離れており、立地、検出された遺構・出土遺物の内容についても若干の違いがある。

大まかには、丘陵の北斜面に位置するA地区、丘陵の北西斜面、尾崎八幡神社の全面に位置するB地区、丘陵の西斜面から南側の水田部分にかけてのC地区、丘陵の南側の水田部分に位置するD地区が立地の状況である。

調査区から検出された遺構の時期については、少しづつ調査地点ごとで差異をみせるが、大きくは以下の4時期に収斂される。弥生中期・弥生時代後期～古墳時代後期・平安時代～鎌倉時代・室町時代～戦国時代である。以下、時期ごとに概要を述べる。

弥生時代中期

B地区において竪穴住居址2棟、C-2地区において土坑2基を検出した外、C-1地区・C-2地区において水田遺構を検出している。C地区に続くD地区では水田遺構は検出されず、美濃川の氾濫原であったと考えられる。

弥生時代中期の遺物は現在の与呂木集落が位置する丘陵上において顕著に採取されており、丘陵上に同時期の集落本体が展開していた可能性は高い。C-2地区では土坑と共に水田遺構が検出されており、集落のある丘陵の西から南斜面が水田として開発されていた様が同える。

B地区において検出された2棟の竪穴住居址は北西向きの緩斜面にあり、沖積地に飛び出た微高地の突端に位置している。丘陵上の集落の北西端にあたるとも考えられるが、検出された住居址1の規模から推して、調査区の周辺に更に数棟の住居址を伴い、小集落を形成していたと考えるべきであろう。近年周辺の調査では、北向きの段丘の突端から弥生時代中期の遺構が点々と検出されており、今回の調査もそのささやかな一例となる。

弥生時代後期～古墳時代後期

C-1地区・C-2地区において水田遺構を検出した。丘陵からの傾斜に沿って水田区画が存在し、条里区画としての企画性は見受けられない。条里形地割り導入前の水田である可能性がある。それ以外の調査区では検出されなかった。漠然とした時期を提示するに留まるものである。

平安時代～鎌倉時代

A地区・C-2地区・D地区において建物址を検出している。A地区では平安時代末～鎌倉時代の極限られた時期の遺構を検出している。南隣に与呂木窯が位置しており、その操業時期と建物の存続時期はほぼ同時期である。窯業に係わる建物址であった可能性は高い。

B地区の建物址の時期は不明であるが、位置的には、A地区の建物址と同じく、窯業に関係し、平安時代～鎌倉時代である可能性が高いものである。

C-2地区（南半）・D地区で検出された建物址ビット群は一つの集落址と考えてよいもので、戦国時代を経て現代へと続く与呂木集落の素形をなすものであろう。

C-1地区・C-2地区（北半）部では水田が検出されている。水田遺構は真北に近い方位をとっており、条里形地割りに乗るものと考えられる。

室町時代～戦国時代

D地区において16世紀後半の遺物を含む土坑・柱穴が検出されている。また、C-1地区では丘陵上部からの転落・流れ込みと考えられる室町時代～戦国時代にかけての遺物が出土している。

16世紀後半の遺構は与呂木遺跡ではもっとも新しく、D地区以外では検出されていない。室町時代にはいると水田化していたものと考えられる。集落は丘陵上に主体が移り、丘陵上から南向きの丘陵裾部のD地区にかけて展開していたのであろう。

D地区的時期の上限は、16世紀後半、この時期は織田軍による三木城攻めに際して丘陵上に本陣が置かれ、周辺は戦場と化した時期である。D地区的遺構の終りを歴史的な事件に理由をもとめるこどもあながら無理ではない。

以上の如く、与呂木遺跡では地点ごとの特徴を見せながら弥生時代中期～戦国時代までの遺構・遺物を検出している。

弥生時代中期の遺構は、現在までのところ、三木市において弥生時代の遺跡が顕著に出現する時期にあたっており、周辺での弥生時代中期の遺跡の出現と軌を一にしている。

平安時代に入って出現する集落は与呂木窯跡・久留美窯跡といった周辺の窯跡の消長と密接に結び付くものであろう。また、明確に条里形地割りが出現する時期もある。

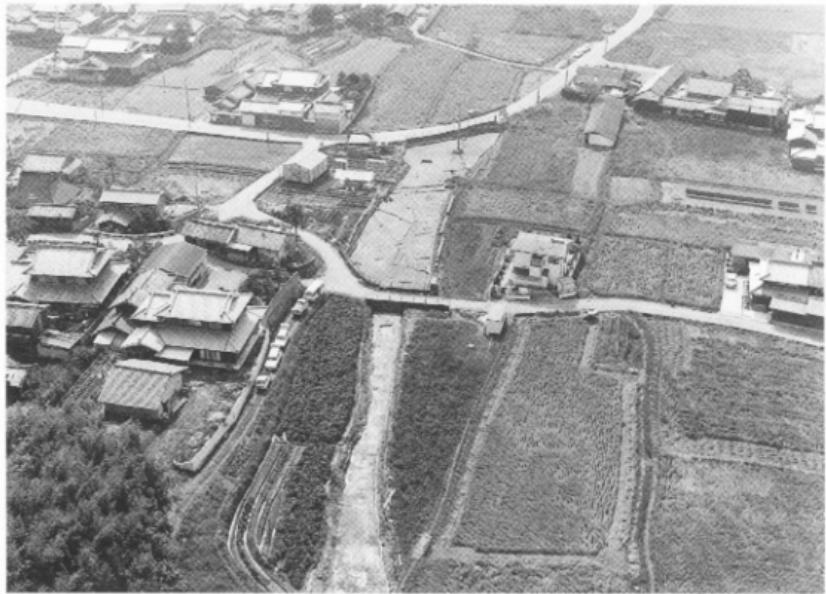
与呂木集落は室町時代には現在の集落に近い形になっていたと考えられ、丘陵の北側・西側の縁辺部は耕地化し、南斜面側に集落の端が伸びる状態となっていた。集落の南端は戦国時代以降には耕地化し、現在の丘陵上を中心とした集落に変化したと捉えることができよう。

なお、今回の調査では、B地区・C-1地区・C-2地区より石核等の旧石器が出土している。これらの遺物は流れ込みと考えられているが、与呂木地区ではこれまでにも尖頭器が採集されており、丘陵上に旧石器時代の遺構が眠る可能性を指摘しておきたい。

写真図版



A-B地区 遠景



C-D地区 遠景

図版一
A地区遺構

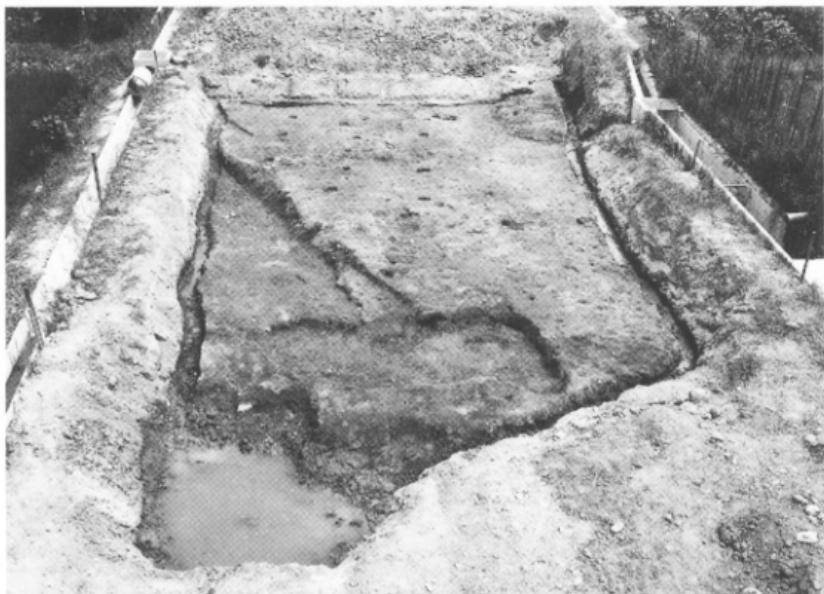


A-1地区 全景(北東から)



A-1地区 振立柱建物1(北から)

図版二 A地区遺構



A-2地区 全景(南西から)



A-1地区 土坑1 遺物出土状況(西から)

図版四 B地区遺構



B地区 全景(東から)



B地区 堪穴住居址1(北から)

図版五 C地区遺構



C-1地区（南から）



C-1地区（南から）

図版六 C地区遺構



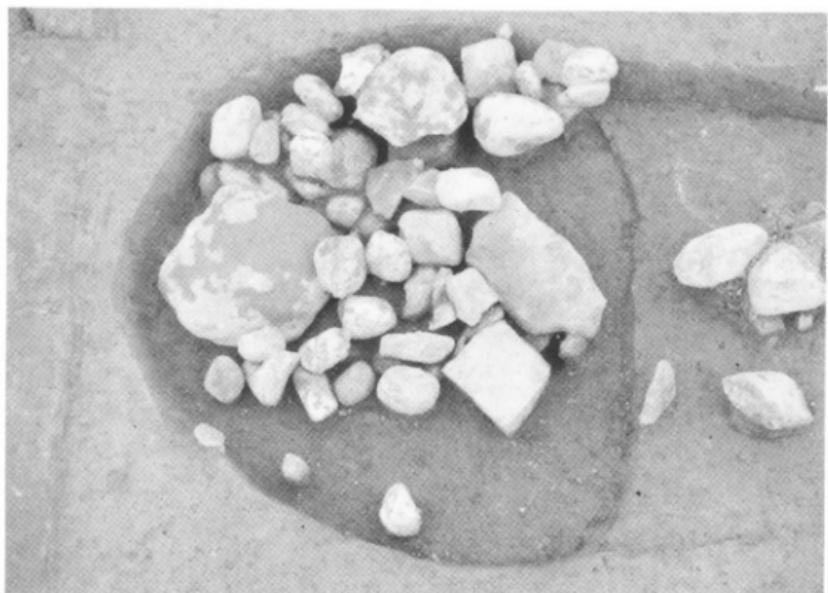
C-2地区 全景航空写真(上が東)



C-2地区 全景(北から)



C-2地区 据立柱建物1(北西から)



C-2地区 土坑1(西から)



D地区 調査前の状況(北から)



D地区 全景(南から)

図版九 D地区



D地区 柱穴群(南から)



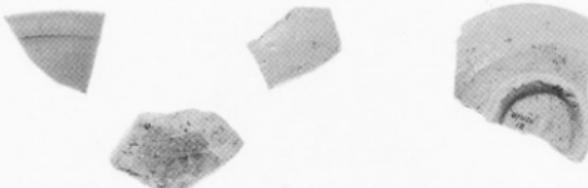
D地区 土壌3断面(南から)

图版十 A 地区出土遗物



3

10



5



6

16



7



8

9

11

包含层出土土器

図版十一 A地区出土遺物



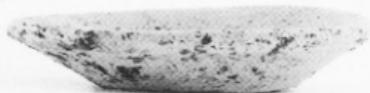
12

13

15

14

包含層出土土器



17



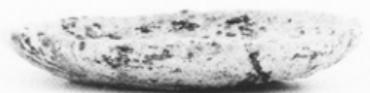
24



28



33



37



44

土坑1出土土器

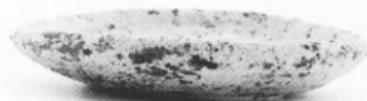
図版十一 A地区出土遺物



47



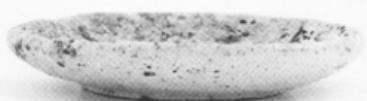
64



66



67



68



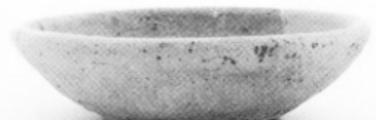
78



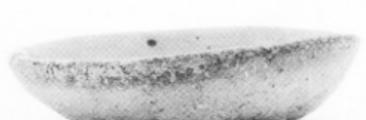
80



81



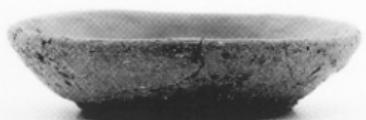
82



83



84



86

土坑1出土土器

圖版十三 A地岡庄遺物



87



88



89



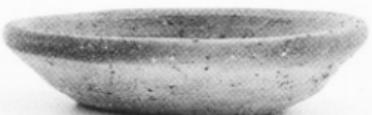
90



91



92



93



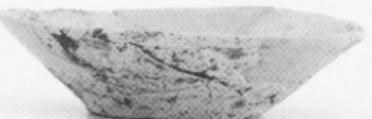
94



98



101



102



103

土坑1出土土器

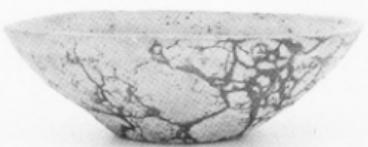
图版十四 A·B地区出土遗物



106



108



109



110



111

土坑1出土土器



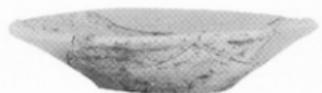
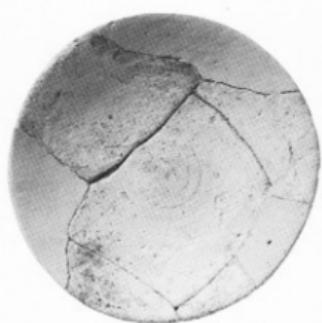
120



145

A·B地区 出土铁器

図版十五 A地区出土遺物



95

97



112

土坑1出土土器

図版十六 A地区出土遺物



113



118

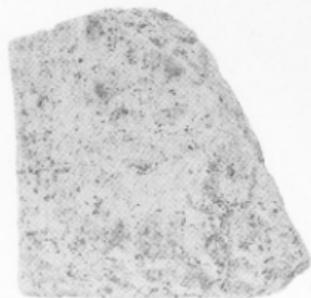


114

軒平瓦・平瓦(表)



113



118



114

117

軒平瓦・平瓦(裏)



115

平瓦(表)



115

平瓦(裏)



116

平瓦(表)



116

平瓦(表)

圖版十九 A·B地出土遺物



121

A地区 出土石器



123

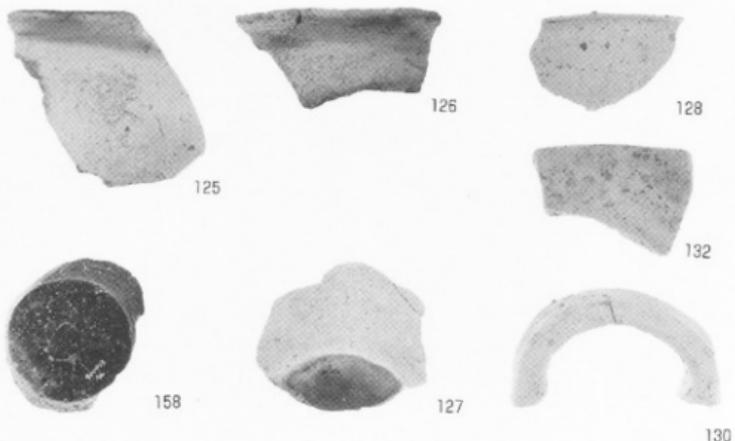
122



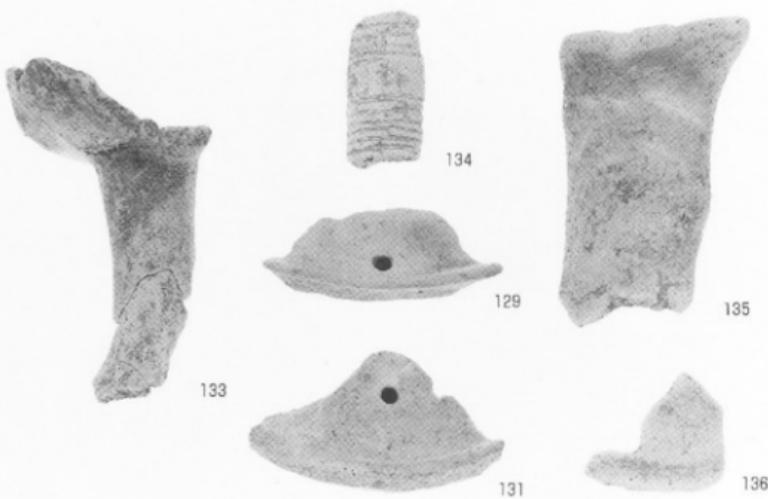
124

B地区 包含層出土土器

圖版二十 B 地區出土遺物



壁穴住居址出土土器



壁穴住居址出土土器

版图十一 B区出土遗物



143



147



146



144



145

B地区 出土铁器



137



138



139



140



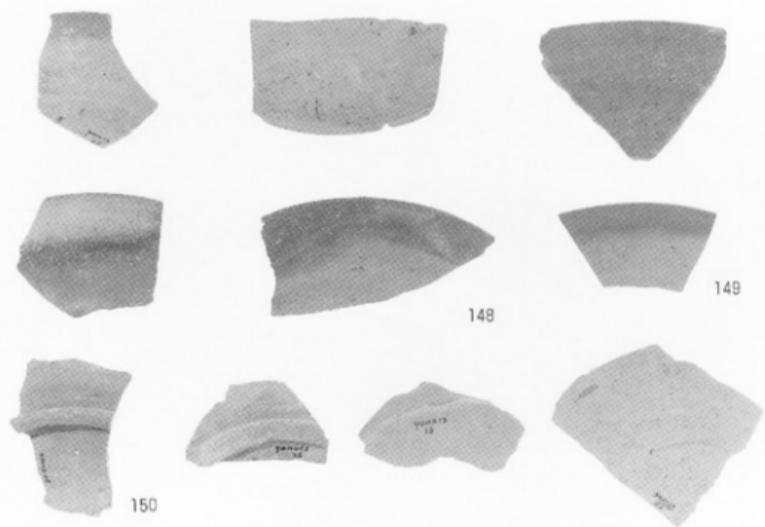
141



142

壁穴住居址1出土石器

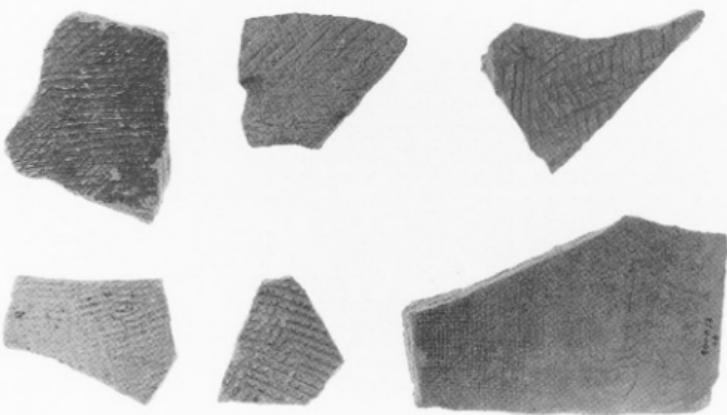
圖版二十一 C地出土遺物



C—1地区 包含層出土土器

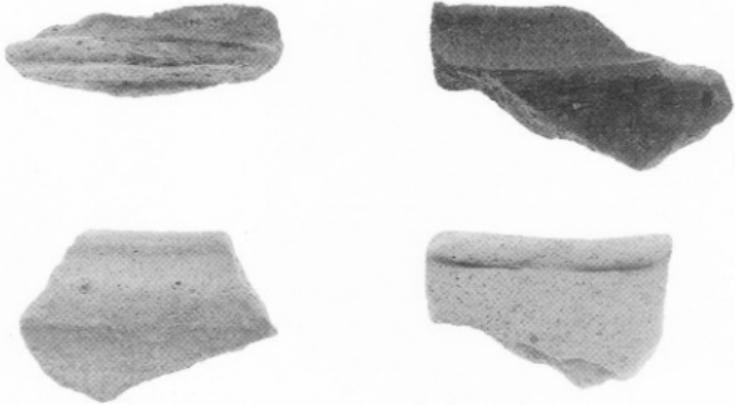


C—1地区 包含層出土土器



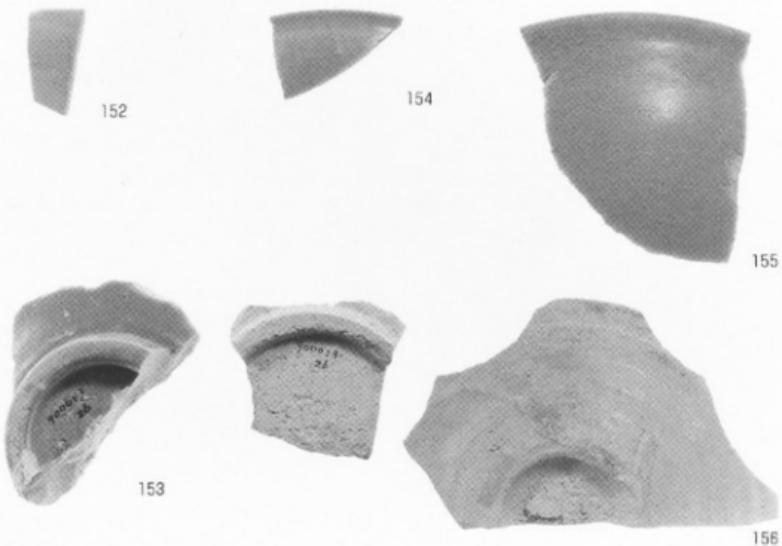
157

C—1地區 包含層出土土器

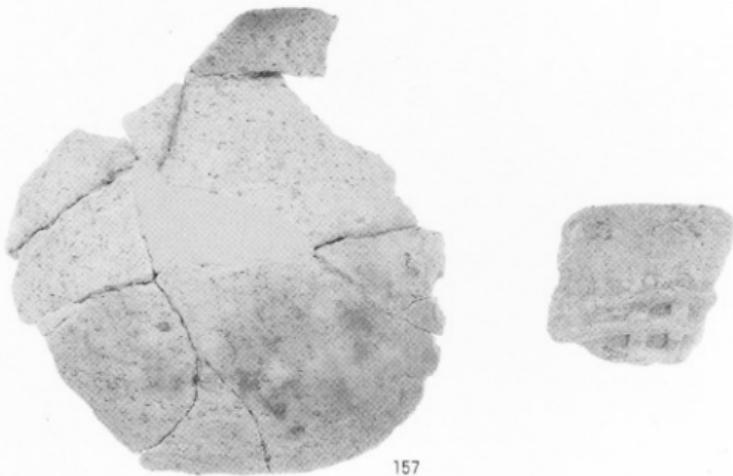


C—1地區 包含層出土土器

図版二十四 C地区出土遺物



C—1地区 出土陶磁器

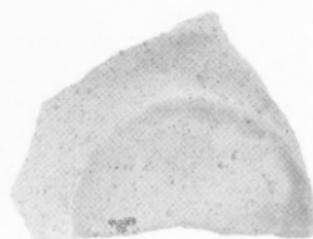


C—1地区 出土弥生土器

圖版二十一
C 地區出土遺物



161



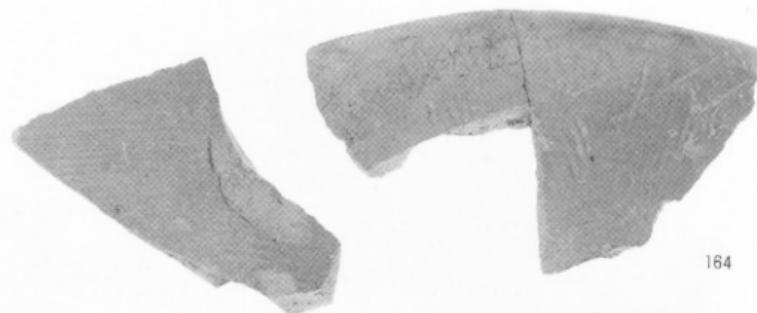
160



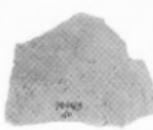
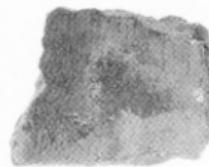
162



163

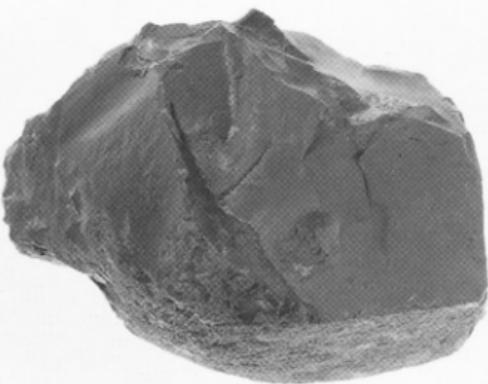


164

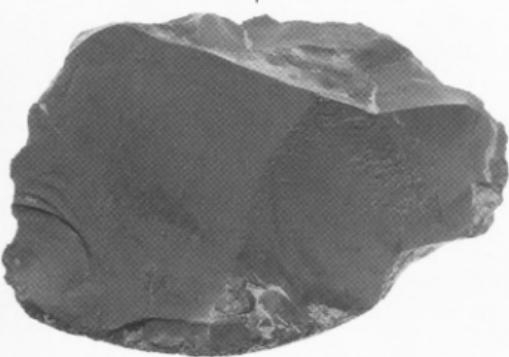


C—2 地區 出土土器

図版二十六 C地区出土遺物



|



165



—



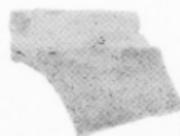
166

C-1地区 出土石器

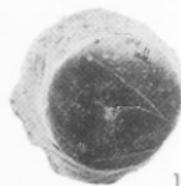
圖版一七 口田岡遺物



167



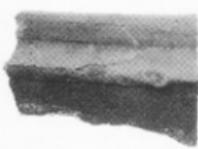
168



169



170



171



172

出土土器

兵庫県文化財調査報告 第133冊

三木市

よろき
与呂木遺跡

——般県道三木環状線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告——

平成6年3月発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区中山手通5丁目10-1
TEL (078) 341-7711

印刷 丸山印刷株式会社

〒676 高砂市米田町神爪57-1